# 東海道名所圖會

四

ル 3
3496
4

門 ル 3
號 3496
卷 4

早稲田大學圖書館
昭和 35. 1 28
藏書

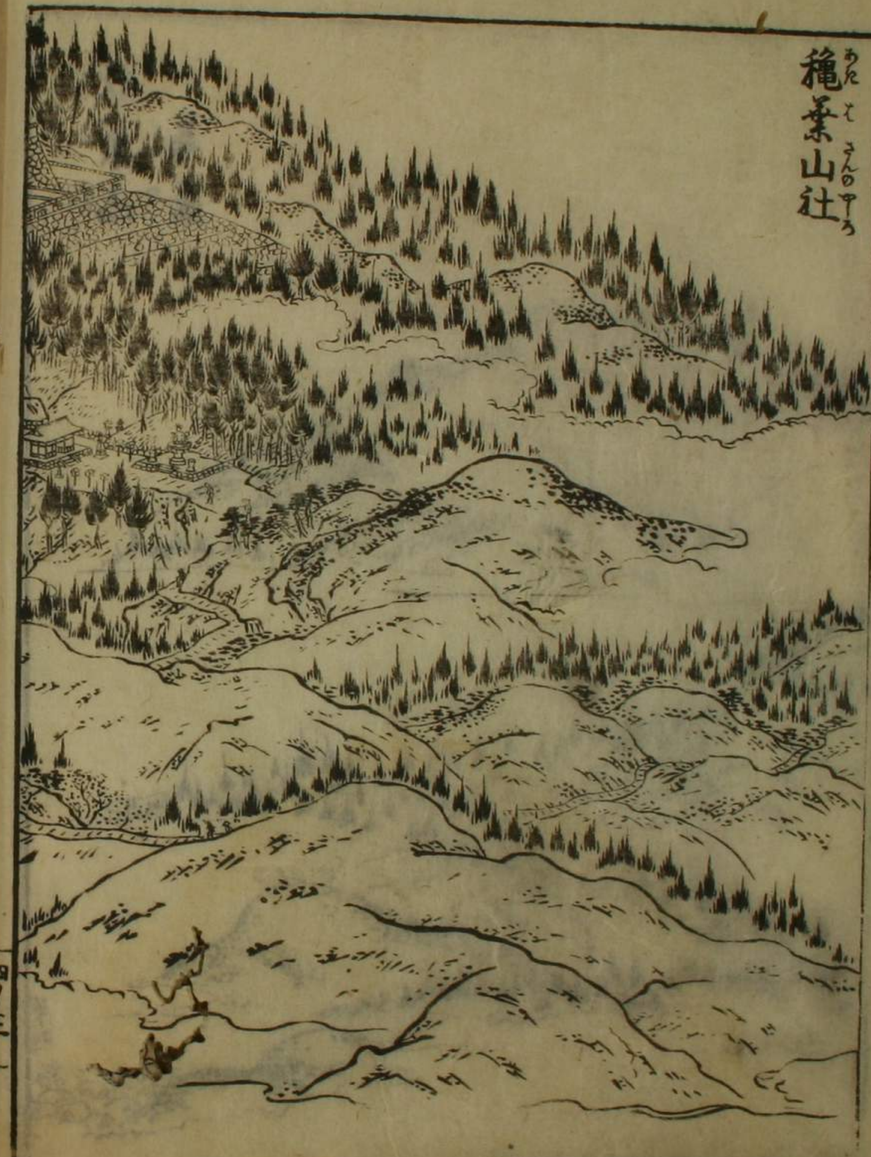
# 東海道名所圖會卷之四

目録


佛殿 白山祠 秋葉權現社 天滿宮 多宝塔 鐘樓 縄巢山
二つ石 什寶 七瀧 京丸
名産葛布 妊身塚 已等麻知神社 ○日坂
子育觀音 四郡橋
菊阪 牧原
淡嶽 阿波波神社 無名山 觀音堂 諏訪原古城
敬滿神社 大井河 駿遠兩國碑 半鐘
瀬戸 名物傳紙
蓮生寺 ○岡部 ○藤枝
○丸子 名産盆石 那閑神社
古枯木 連歌師宗長古蹟 嘯月亭
建穂神社 建穂寺 用宗古城
禅堂 神饌藏 傳藏石 ○掛川
佐夜中山 夜泣石 安藤広重
菊川
初倉山
○金谷
○嶋田
田中城
宇津山 蔦細道
手紙 手紙石 京金鬼
繋山
石原

安部川
賤機山
清水
焼津神社
蛯ケ沈
三保松原
瀬名川
清見閣
清見潟
清見寺
石浮屠二基
清見寺ト景詩
古奴吳濱
薩埵嶺
足利尊氏直義古戦場
○由井
富士川名所
曽我兄弟敵討舞台
依間神社
弥勒茶屋
○駿府
糸山
浜間社
名産石陪茶
足久保観音
草薙神社
薙大樹
香形鐘
有渡濱
御穂神社
庵原
浮見嵜
清見禅寺
佛殿
開山堂
足利尊氏像
龍虎画
客殿書
衝立画
○興津
岫嵜
甲州身延山道
袖師浦
名産栄螺鮑
○蒲原古城
○蒲原
古家川
二反橋
の陪市
別雷社
麻機山
梶原一門塚
久能寺
竹藪
久能山
羽衣松
○江尻
盧嵜
角田川
清見浦
奥津川
磐城山
豊積神社
富士川

秋葉山
一鳥居


穐葉山社

大登山秋葉寺 遠州周知郡犬居村山ふあり 御宗書 同郡久野村可睡齋ふ扇を 天正年中 母堂

本堂聖観音 長三尺許り基大士の作脇士勝軍地蔵 十一面観音ハ安倍倶ふ同作

秋葉山権現社 本堂の側ふあり 祭神大己貴命 或云延喜式内 小國神社

三尺坊 秋葉同社ふあるる多寶塔 大日如来ハ安倍 秋葉社の側ふあり

禅堂 本堂の右ふあり 経堂 禅堂の右の方ふあるる 白山祠 本堂の右の方ふあり

天備宮 本堂のお庭の方ふあり 鐘楼 経堂の後ふあり 神輿蔵 秋葉祠の右ふあり

榛纖弁 本堂より八町許り南山の名 一ノ宮 板下村の上ふあり 額 金明山額

二鳥居 一ノ宮の上ふあり 額 最勝廟 奉勅 月心十二翁方面山書

奥院 本尊不動明王傳教大師作龍頭山と号ス本堂より五の方

支那山は寺號と原ハ舊記見ハ蔵ふ云むり 元正天皇御宇泰老

二年ふ僧正行基諸國巡行の時南山ふ登り老杉を伐て聖観音像軍地蔵

十一面大悲の尊像ニ軀ハ彫刻して國家安民五穀豊饒の為ふ伽藍ハ

基創ーとてふ三佛ハ安倍傳聞行基大士ふ文殊菩薩ハ化身ニ

天竺波羅門尊者本朝相見の時権者ふ本地事ハ朝都東大寺ハ

記傳ふ鮮之尚寺の鎮守ハ神ハ延喜式内小國神社と号ー神躰ハ己貴

命おれと秋葉権現と称ハ一山護神ふ三尺坊と同社と犯ス悪人身

の附き信州の産ふ其母考ふ観世音ハ信ー普門品ハ誦ス事数百

卷ふ連ふ或夜ハ悪ハ三十三身の中ふて迦楼羅身ハ現ーあとふて

妊體ー臨月ふ到ー徧德赤滿の相ある男子ハ誕ス父母解ふ捨ひ

成長ふ從ひ出家ふ入ー也ふ紙法國蔵王堂十二坊ハ中三尺坊ふ住職ス

此時不動ニ昧の法ハ行ひ一七ヶ日ふ八千枚八千度八千莫支と焼ー三千度

執行ーて滿座の曉焼香の火烈々とーて燃上ス烏形兩翼ふーて

左右ふ劔索ハ持ス金剛羂索ハ

心ふ観念を忽煩悩業生死の苦患滅盡ーて飛行自在の神通を

得る然ニ一ツの白狐出現セーて君ふ来ーて行國を止ーん

所ふ永住ーて友生利益專ふせんと誓ひ虚空ハ飛行ーゆひ

此秋葉山ハ白狐とゞまる因縁にて安住の嶺と定め給ふ基大士の安置の大悲の尊像を安置し給ふ　ゆゑ其比行基開基年老二年より九十年に後ふて　淳和天皇御宇大同四年に弟子其後弘仁二年より諸国に遊化して普く衆生に利益せんとて霊嶽霊窟に飛行し給ふ其星霜幾ばくか名山名蹟とゝめ給ふ　六十餘年に後　伏見院御宇永仁二年八月中旬ハ秋葉山嶺ハ帰峯めぐりあくと大登山と號まゐる南海の汀より次第に攀登りて此山に軸際より又五十町とまゐる此標相の伽地ハ到る入路十住十行十回向十地昇進して後　世尊階級四十二位と候まゐる儀に上八町を四方四隅の菩薩文殊普賢観音弥勒　頂上の則八葉に蓮華表まゐる又秋葉寺と號まゐる上古此山ハ水乏かりゆゑ寺伽藍を建て鎮護の神社祈願ぬれば二天坊神勅に蒙りて天龍八部に招請しけれ忽霊験あり

て霹靂震雷し一夜の中に西少の隅ハあらりて清泉涌出する時の人歓喜踊躍して水中を見れば潔白の明珠二顆あり是蛟龍領下の宝玉と又蝦蟆生て背面ハ秋葉の二字に頂を遊ぶ来る因縁寺に秋葉と號ハかの龍に玉ハ今ハ寺鎮として宝庫ハ蔵む蝦蟆ハ井水底ハ入る見に加之かの清泉に石ハ寛永年中山焼生ありて機と織たれしより此水を機織井と呼ぶ其織る布に青銅十疋に副て住職ハ賜ハるまれ又今ハ寺の宝物とし機布を住職乃涅槃衣とあれに宝ハ不忘慈の毒水ゆへ大旱の時雲ハ忽膏雨降る是龍神感応の名水と秋葉山略伝記大概かくの如し　古縁起春記等を言ふ禄天文の間甲州武田信玄ハ騒擾ハ罹て兵燹に焼ハ只秋葉神社観音堂殿ハ遺り宝品を寺僧携て逃免るゆへ今ハ在て甲州乱妨の軍勢堂社に焼拂ハんとて教ゆの火に入れども棟上より白水流れ出て火に入る免るまれに霊験著しく近年都鄙の来信暑寒と絶ハん

蟻の如く道ふほとり秋葉講して國々縣々より多くの人数と聚り
月参する宿々に泊札辻々別れ路の標石あるひは石燒燈籠建こ
常夜と思ひ勧進の徇を京師洛東聖護院村より近年経営ありて
紫庭の御祈願所とし給はれと初て江戸大坂其外諸國より多く
の札を得人つとひて猥しき事法筵のゆゑ殊ふ山廿四日月毎の
縁日とて山麓も夜参に堵足参を埒斷寒垢離籠屋を
新端とつゝね山上山下茶店の派ひ坂下村の旗籠戸倉の宿々
みな此神の霊験なるべし年毎に例祭は十一月十日より十六日ふ至内
此夜せの時社頭の後なる白狐ふ旅て火鑵の神祭あり御神楽御湯
と捧る其時第八条後の狩見紙禁じ掛れり七十五膳の神供紙
備ふ此時ふ至て山嶺山麓震動する事衝久し蕪云山神多く
さふ雲霞と法樂歓喜の音こと多く集れ遠近紙いらん坊ふ
一夜籠り社おゝ敬礼をる事稲麻竹葦のゆゑ道中に旅ひ

馬牛輿に繁昌駿数を尽くふる此御神の霊験の尤くふ中に第一ふ弓矢
刀杖の横難を免れ第二ふ火災焼亡の危を紙免れ第三ふ洪水流没
此難紙免れ第四ふ中古無火の時も軍卒多く挽て其鎮煙ふ上く社
頭の檜皮ふ一火ふ焦せる時水雲起りて忽ち消もこれ今ふ遺りて見くさう
火伏鎮護の神徳及生化蓋の方便海内一条ふ伝敬せんとい一事なり
三尺坊書物 社前ふ 永仁二年八月十六日 龍王 緑起ふ 牛王 社中ふ牛王の本を
駒角 駒王 鹿王 烏王 不老貝 社前ふ
秋葉山道法 上方京師より 東海道 中山道 の関くりゆへ入る八里主
大野川あり吉田豊川の上 大平 神沢 石打 大畑の岩と唱く細川巣山を主内
三遠の国境 石打村の溪川 推草 多く 龍の投川の上あり 舎
いふ山里ふ至内風来寺 それ 秋葉山の
往きて六十町の坂路 ○江戸の方より 余り
山へ入る森の岩へ 一の巌へ
九八 四十八ケ巌 土人
猶多 人 一ノ巌
あり舟 安 安 安

風朱ちゃう
秋葉山まで
八里餘みち
とゝ弱く真中の
大野といふ
所の女ハ旅人
の荷物
背負て
坂路を
やとい
ゆうて
世ワうと
する
洛小夫婦
の
婦人ハ
比せん


秋葉の迫く
石打村ゆ
渓川ふ椎茸を
多く乾べく
椎茸と他ふ
匂ひ
此地の名産とす

七龍　風雨雷霆うち拔き龍山の巡り
龍山の高サ百丈ふし七龍ふ蔓る故ふ名とす

京丸　秋葉山の小ゝあり山家ふして一村の名し民居い僅ふ五軒其長秋
源左衛門尉と云家ふ至て代の金巾子の冠縫織の袍錦直垂所持す
古證文看記一紙を以て
逆乱ふ襲れし山中ふ隱し土人むし其苗孫と云伝ふ
日坂まで三里九丁町驛路なり
掛川（遠江）　といふ人駿州ふ武田信玄ふ攻られ土岐の山家ふ落り其後高松
籠らず永祿十二年淚松の軍勢ふ攻られ城外ふ合戦を
ふ石田ふ高橋ふ後紀今を又三月高城ふ入城外ふ合戦を
家ふ　花沼三九郎　高橋傳九郎　松下加藤平右衛門　石川新左衛門
是非ふ等　はるゝ　戦ふ　の城を抱る事叶ひ難し　三月廿日今川氏真掛川
小田原ふ為ふ引取る　同國懸塚より船ふ乘く
それより代の諸侯逆ひ　岡崎高城を石川日向守ふ護り
富士紀行
おりてさゝ波さゝ波ふかけ川やいとゝぬれ拔ふ秋のむら雨　東孝法印

名産葛布　葛布ふ成る　吾服の市店ふ出を多い鞠稽ふ用ゆられ
藤枝ゆ　掛川の名産と下坂ふ銀治も此城下ふ有り又綾の波と沽し
おれ此武所ふ〜ひと門くふ葛てふ布ふ掛川のもの　高相

已等乃麻知神社　日坂のお一西の方宮村ふ有り今磐田八幡宮と称し
延喜式内佐野郡ふ属を又一説ふ掛川城下海道
篇の裏町の小社ふいふも又の大仙寺村諏訪社ふ云も分明ふ決
此所のお一ふ昭和川と云ふ社迄ふ緑綿山とそ唯くとら

雄鹿の山ちりさくとり碁石出る里俗云むり此神の眷ふ龍宮へ
と領ひしかも神ゆゝ龍神ふられと唱へ牛川の
少一雄雄の緑ふ出く姫と称ひ
圍んくふふより碁盤と投ひけ雄雄の緑此所
裏緑二ツの山と成くく今ふ碁石の出るを雄くら山と
ひ姫と投ひしゆふ所を今ふ剛腕村と云
文德實録云嘉祥三年七月遠江國事任社
授従五位下
三代實録云貞觀二年正月廿七日戊寅授遠江國
真知乃神並正五位上
ことのまくれ形神いとくのもゝ〜ゆのこゝろとんとやいとれゆうと
おりふりいとおりゝゝくる
十一月廿日記
廿四日ふるふりうゆさるの中山ある事任とゆやいふ社のほとも
道いとおりゝ後ゝ山ゆけゆて嵐もあらぬ思ふり帰るくふ
遠近れうゆはゞ麥さと山ふ似多くゆちくゆつれゝ海りくの
里さくく川といふ所ふとゞまる
集集
独ゆけてたのうゆゝもゆ孫むくの海くゆゆゆくもとゆうくる　相模
名字
又まん名称ゆとれまゆゝゆゝゆゝちくゆゆゆ社とみち集　七明

元亨紀行 ことのまいさと雪多所多し〜後おりて〜まうで其所〜まうでとまりて

いてゝうのひつけらられし

ゆふまぐれてだたのむしのまぎれるまぎれる祈のまゝ〜祝　光行

貴應海道記 山口といふ今宿祝ゝこれぞ汚い旧ふるかりて通ぜり登原祝祈ふ〜さと

むゝとさぶ〜あまうゝ〜さりぐ茅の仮ゝ社よ参侍祝本地とぞ

ちゝ祝仏陀ゝをしまうにらん薩埵ゝと参ゝらん本丹とぞ神ゝ祝わうれを

ゆふべ〜と身もちぐゝゆふ後身もちぐゝゆふまを祝のむ〜ゝ大いゝ倫山よあゝ祝

ゝも玄〜ゝくゝ年つゝ〜ゝもゝゝいゝ願ゝ大ぐ畢竟空敬ゝ法味祝

納受〜て直實不虚の感應をゝれた万へ

ゝゝふゝゝのまゝにゆゝ杉たてる祈のちゝひれまゝ〜ゝゝゝん

曙記 ゝゝの海〜れ参〜ゝゝて　ゝん廣々い大仙寺村の蔵紡明神ゝゝ

みゝ光ゝゝ祈ゝまゝゝて参ゝまちゝゝゝのゝゝゝゝゝゝん　ゝゝ廣々

入坂を祝むゝてゝゝ町ゝゝゝゝゝゝゝ八幡宮ゝゝ花表ゝ摺ゝゝゝ

部祝ゝ〜ゝゝゝゝゝゝゝ

佐夜中山
子育安産
くらがく
横とり
ゆせて
郭公
俗圓更
東山
宗長
宗長

佐夜中山 駿河の東の方に東海道藤枝宿より東へ五里ばかり過る東ふとんに佐夜の山西の麓に新坂といふこゝに宗長の都の長歌あり

方角抄 よれたゞ小夜の山西の麓に新坂といふこゝに宗長の都の長歌あり

いつまふこゝの中山ふもとありぬさゝ波さゝよの中山さゝやの中山ゝ

中納言 師長公の国の住ふくゝひりのひゝの時土民のさゝよの中山

ゝ作り名ゝゝ中古の比人達ふじもさゝ〜ふ漢れく作る又孫三位頼政

いさゝの長山と書かれ山びと老翁よりの作り〜うたさゝやの中山と

巻抄 紀と云又或云歌のところ紙ごろのさゝよとしさゝよとしたる

紀抄 換るふ比山遠江国佐野郡ゝ名あるさゝ名所ゝ勅撰ふ古歌

比例 ゝ〜〜〜

## 雲助行

雲助是何者更非
雲助兒尋昔元歷
歷如何今此姿一
朝蒙勘當十年受
艱難踏鹽體能固
王秋肌每寒玄古
餅迫咽坂東酒涙
身雖憂我非病雖
社唯是貧袖裏肘
自見裾斷足殊輕
徘徊街道節欲裂
生馬暗夜宮建念
寺月當勝戻濃偶
雖一盃受未見在
所松莫謂吾無舍
暮天空太平一本
有竹扶萬里可
横行

銅脚

[illegible]記 佐渡中山は古今集乃歌ふよこそうゐるやとよまれさまで名高き
名所とは世人の知られもてるふいたゝ〳〵ふか源山にて
松杉おゝしくたゞしく南は野山あく秋の花つゆさへ谷そう
茂ふり川る白雲と分入ふもとの村人とめもあわし
虫の絲おのゝ音〳〵

真葛原記 佐渡中山ふの絲此山口にはたゞ〳〵光れが花か源谷石も源谷一筆
みぐさこみちゝ塘のうへ鳴うり表谷の樵路眼下ふ見て落ち鳴を足
の下に聞谷の表にを高く〳〵山のあなたこれば中山〳〵見へさうり山を
むり〳〵折のこゝろふる紀ゞこゝ〳〵樵を分〳〵たゞ〳〵まを忘千億のみやり
みるたのさ〳〵山所を其名こゝふ世ほいとさ絵をれた一時のはたやふ百般
ゝまりて去ゞ先ゆけハ秦蓋の表のさいゆれそして耳とあらひ
高強の風のひゞきい足わ〳〵〳〵身ふしも

曙記 佐渡中山ふ多くふまえゆゞりてゝ〳〵
はく〳〵なりとて
うれ〳〵ゝもうれもれく今ふ[illegible]

[illegible]記 陸奥ふはゞく松ゆさくのうゆくゆゝ〳〵紀さ表の中山

内侍紀行 [illegible]法師ゞいのちゝ〳〵佐渡の中山と落せ〳〵いさてゆゝゆの年く

坂一道、升降是、早一天、夢、殘馬上、不成眠、此山無限西行、壽能、使、詠歌、千古傳、

[illegible]記 佐渡中山街道の夜哭松 佐渡石の東そ町ゝ
真中ふ 佐渡松の傳ふ 佐渡石の東そ町ゝ

妊婦塚 新田の茅葺ふ [illegible]
[illegible]谷の富のまゝ通ふ [illegible]
[illegible]の日に会ト [illegible]
[illegible]出 [illegible]
[illegible]の [illegible]
[illegible]人の渡今 [illegible]
[illegible]佐田の [illegible]
[illegible]是 [illegible]

菊川

菊川宿
中御門宗行つゝ基久の
古れ歌に藻塩草
東ふたりの人は菊川に
宿るとて菊水の下流を
散るを延るとて菊川の名を
今を盛りとしらぬ人
あの晉の屋
信じ
殺せ
浪速春泉画
百生りや
一きりの
ひらり
五代

子育観音　小秋峠にあり久米寺といふ真言の草堂に子育の観音
あり久くより本尊正観音なり基僧正の開基なり原
天平年中に境内に石表あり其表に云慶長五年関ヶ原
の役の時山内対馬守一豊此地に陣を張り
圖初将軍家に饗應し奉りし遺跡なり亭に
九年に石表に建るところなり　遠江国　蓁原郡　佐野郡　城飼郡　山名郡
四郡橋　久米寺のふもとあり　等すの四郡の境なり
菊川　菊川村にあり川上に菊川村ひろしの
駅場なり今は支場となる此所ふもとに根鎌沼今ふあり
東海日記
十三日甲午於遠江國菊川宿佐々木三郎盛綱
指副小刀於鮭楚割居敷以子息小童送進御宿
申云只今削之今食之處氣味頗懇切早可聞食
歟云云殊御自愛彼折敷被染御自筆日
東鑑記云
建久三年七月中御門右中納言宗行卿小山新左衛門尉具[illegible]
てあり名ぐ遠江の菊川宿ふ着のふ夜とばかりに向ひて菊川の
則おふ流なるべきさん俗とかくれば硯を出く宿の柱ふ書はべ

昔南陽縣之菊水下流延齢
今東海道之菊川宿西岸亡命
光明記
菊川と云所ありそこにふしぬ暴悪なる人の罪有く吾妻へ下られる小宿ふ泊りしなる昔人の
菊水下流を汲ぐ齢延のぶ今ハ東海道乃菊川の西岸なる宿
今延のぶとなる家也陸奥ふ書れしなりとなたれば
中そこの家と名るに火の色ふ成けてうけてこれを渉しぬ
者あり今ハのかぎりとくくのあーとさろん形見文法なる成
名るこ我はうみ元世のなしひいとぐと成ふなるこ
書はこの形見を今なるなるあとくみ雪と雲れのひろん
貞慶法師記
胡馬記川光はれく日為翅さぐりぬれい茶食を成ーあるんがさえ
菊川の旨ふ成ふ成家のそ一成ふ故中御門中納言宗行卿
書付られさり彼菊陽縣の菊水下流延齢歌をのぐ東海道の
菊川の西岸ふ中さりて今を金くせんとなるあとにあられきもそおぐ

其功を累葉乃賢枝ふせれ其宮ハ芳門の老ろ紀階ふ昇ら云のうへ
の月ゆ〳〵ゆ冠のかゝり紀まゝ〳〵仙洞の花の下ゆ錦の袖の色紀ゆ
ゆ〳〵身さろ栄分ふあまうて時とを風と匂ひ〳〵くゞくそれをゆさ
〳〵そちく紀もまさゞひ遠さもゆびさ〳〵もうゆ紀ゆ見むとゆらゆる
ゆさそもあさまう〳〵そちゆ紀久こを中旬天下風あれ〳〵海内
の浪さくゞさ闘乱の亂將ゆ花城ろうこゞれ合戦の勢士ゆ夷
圍ろう敵ふ暴雷雲紀答う〳〵て日月光紀あゆそれ軍立紀を
うごの〳〵てろう鉄威と燃ろふ　下累

お〳〵ゆあれゞさ紀ゆあゆれとゆゞ紀のあとゆさろゆ在どの旅

俊基朝臣再び関東下向あり〳〵時宿の名紀問ゆゞ蒲川と者ふ
兼久が軍に光親つ院宣書ゆひ〳〵罪ふうつて関東ゆ召ゆられ紀宿ゆて
昔吉陽縣菊水とゆて四旬紀書さろ〳〵事紀ゆひゆて遠さむうみ
兼ゆ跡今紀我身の上ふゆろ後れやいとく後さろんん一首ゆ歌と者ゆ様ふ書れゆる

いふ〳〵ゆくろ〳〵ゆ紀ろく川の同一流ふ身をゆ流ん　俊基朝臣

桜ふ東鑑ふ院宣紀書ゆひ〳〵中御門宗行々ゆ行ろ事ゆ記の親鸞ゆゞ〳〵光親ゆゞ〳〵
焼さろと書〳〵ゆ兼久こゆ紀ゆ久こゆ紀ゆ二年の後ゆ紀ゆ久こゆ紀ゆ二年後の事ゆ紀ゆ久こゆ紀ゆ應徳を記ふ四
旬の事書〳〵ゆ兼久こゆ紀ゆ二年後の事ゆ紀ゆ久こゆ紀ゆ應徳を記ふ四

**菊阪** 菊川村ろう中ろう坂ゆ紀ゆ坂路十六町ゆ在の方
男鹿村ふ菊形の名石あり

**牧原** 初メハ後訪原と云ろう天正の比ろう牧原と為む
あゝふ北之庄祠後訪祠あり

**諏訪原古城** 牧原ゆ遠ろ尚高ゆ城ゆ天正の比ろう武田左馬助信豊馬場
小泉隼人中条孫五郎孟同年七月後松ろう攻ろう者人〳〵
防ろう〳〵後ろ〳〵同八月廿四日松平周防ろう忠次と者將〳〵
ゆ田左門六津土左衛門ろう〳〵同小泉
ろう〳〵脇〳〵城を出ろ〳〵番〳〵て
周防ろう中忠次と城を攻ろ〳〵
固ゆて名を得ろ〳〵
ようへ〳〵軍法の奥儀ふ
驛ろう無間山〳〵ゆ紀ゆ人ふろう又ハ
野の庚さ方を理作ろ〳〵道筋ふ〳〵〳〵鞠々ろう嚮野〳〵
天守の鬼ゆ〳〵ゆ紀ゆ敬然〳〵ゆ紀ゆ切の弘

**初倉山** 金谷坂の上方紀〳〵山の西の方ふ初倉里あり金谷坂を
の流紀見ふ〳〵〳〵岐ろう金谷の驛七井川
風景の佳境ろう富士山ゆ遠ろ〳〵

阿波が嶽
阿波波神社
出小海間ふくらい
東海集云
右の方遠山秀麗
阿波ゝの阿林
是ゝ人ゝ
空えるく
深山雲の
ちくとうの嶽
ちくとうの人
足ゐ人
東湖

梅枝
ひなの海
はこくらく
鉢の地獄
うりくらい
餓鬼
明夕
日坂

淡嶽 遠江佐野郡西山村の内にあり 城の腰中より東北へ入る半腹
二里許にして又山あり 金谷坂へ出る道 七里半にして頂に
杉の村立 蒼々として くらし

東海道もて名高し 雲の上にかゞやけれ秋の風 貞徳真画

阿波波神社 淡嶽の高峯にあり 延喜式内小社 未考
無間山観音寺 高圓久野村可睡齋の末寺 阿波々社の下にあり 猟宗曹洞
本尊千手観音 ふ西国三十三所の観音の像 高圓三尺許 俗にこれを波々の神社 本地堂 脇侍
堂舎庫裏等大ふ 高圓久野村 可睡齋の末寺 高圓の体にて 時
住僧もなくして 居の光景 毎年二月初午の日
近郷 西山村 村老 薬師 村老 あらく
法會 云むかし 山ふ垂間の滝と持て現世のてい
量の財寶と得 地獄ふ 蓋 土人云
故ふ山を垂間山 山 今 滝と名 ふ 垂間の滝 由来
むかし 堂下へ埋 又 鶴見 因幡が 垂間の滝 由来
くく 仮 中山 盃 倶ふ 志 拡 ふ
足 倶 山 崖 峻 踏 扶
ぞれで 垂間 獄へ 集 時
けちの滝 仮 接 集 助 垂間の滝

半鐘 観音堂の様側ふ 仮 偽

遠州濱松庄宇布見長寶寺
勧進 檀那阿闍梨 去仮太祖 舜忌
永和二年丙辰二月十五日
豊寺云 山 陸い 仮 験の山伏 荷 高圓長宝ち
ふ 持 仮 賭 圓 碁 其時 我等 負ふ 勝
又一説ふ垂間の滝口明應の比 仮 偽 諸人ふ罪と 真
古弁の底へ捨 落 今も 其古弁へ 神と逆ふ 投入 れ 接
同 牛 敗 宝 と 得 ひ
つけ 神号の慶 ふ 是 仮
ふ 雑 説 仮 記 延喜式 神名帳ふ 神社 号 仮

金谷 遠江

大弁川の河原通 多くい
石径 ふ

嶋田まで七里 山 通 ふ

数満神社 遠州秦原郡谷口村ふあり 大弁川 七里 程
川下 延喜式云 石神 大 谷川 中 敗 天 仮
大弁河 或 大堰 又 数 谷口 金谷の駅の
水源い 仮 州の山谷 ふ 陽 あり
藤枝州

おつさ仮 業 大弁川のくて我遠さ初金谷の山 三蓮宗
ふ日菊川仮いて 寺 山を大弁川といふ川をつる水ふこあ

常〜ルを為うひく〜ひろ〜いくまとしやつこたる
形うるのいてたらんおものけとしてもろらば
さひ生る都のこゝちはわいの眺の石井まも夜〜
おしうちの月は為うれる奥より大井川とりさ〜それも
ちるくとこゝ為ここの水れうちふ一ものゝ沢流れ別れもは
の眺ごとやかく入ちひろふ州こうり中くまうもんうう
もよ和あおり〜為く覚ゆるいのゆみち見こ続くなれろん
龍田のなゝひどもたび〜すうの乳
日数ハ〜多ひのあそれい大井川とうぬ水もふ〜紀色る
大堰のとる丸人都ふありし名沢笠く亀山殿の行幸れ嵐の
山れ花盛り龍頭鷁首の船ふ乗詩歌管絃の宴ふ侍〜弟も
今い再び見ん出世の業と為ねこちりひはぐけ
東武紀行
徐ゆ渕ふ忘ひのそこ大井川の人の心れ花も為れ波〜

澤庵和尚

駿遠兩國堰　大井川の半ハ遠州ゆ駿州へ近ゆ下流西の方へ為て
の東ゆも遠州の村里まで〜ろ半多〜
西原紀行
大堰川い駿河のと遠江との堰こ明日香川ゆ〜孫と霖雨ふ〜も渕瀬ゆ
こ事ゆ〜びくゆれば東れ山の岩沢流れて為田の驛川の原の中にあ〜半も
あ〜西のゆさふ流〜金谷れ山ふ抜ふ半もあり又一まちの大川とゆりて大木
沙石沢流を半もあり木〜れ枝流とゆりて一里をろうゆ間ふ〜ろ半も
をありされゆ〜へう徒杜樂梁もゆりゆさ沢ゆふ徒来め〜馬川の
瀬とゆ〜されば金谷ふ待もあり為田ふゆ〜まるもあり渕りゆまて為ゆ〜若
もあり辛ふ〜て向ひの岩ふ至るもゆ為田金谷の民ものゆ家ゆたゆ〜ひ為
九ゆ旅客の裏沢むさぼる田ふ為水と抜ぶ横炭翁ゆ早夜ふ〜て手れ寒沢
を待ゆ〜ゆ川の水れ家沢流〜田を換ふゆ〜ふ防鴨河使防葛野川の使沢
ゆ為れ〜むう〜為ゆ半も口いとゆりひ出さ〜んや

羅山

○尋常 掲屬心。遍。腰。叱。馬。呼。奴。魂。欲。鎖。
來。往。就。中。何。處。苦。無。用。無。絶。復。無。橋
○海道 奔。流。弟。一。川。鑑。輿。舁。載。擔。夫。肩。
洛西 大井。雖。同。構。此。不。省。捧。彼。有。船

# 大井川

大井川あらまし
流れ方や
石万石代
流の上
瀧々

むかしよりこそ
大井川あらく
いとこそ

家集
あるとやこの都の
西れ大井川
ひとしらんん
さらに武士

春城雅行

大井川渡之圖
旅客馮陵幀涉過
横天湍瀨急頽波
水光倒疋中山樹
石勢轟流大堰川
決口年年沈白馬
防堤處處臥蒼蛇
旱知夏后行無事
安得成功濟世多

乙卯仲夏從東關
歸路憩嶋田驛長
大久保氏家主介屋
大井川渡乃其岩志
治厚矣
大井川の上り
蓮之郎

きれを抜大堰川を東海道第一の急流なりとして薫風ゆるみかさ
なり〜穴吹吹ぬれば名高き山〜へとり舟多く棹あり橋無ふして徒渡
の人を鳩田金谷の川越所ふ立寄て休み川の定賃を少て其賃銭いと
別荷をたづさへ渡下ふ越さ心運搬肩車をどれぬふ有て交易の賈人
京堂を吾妻つまを伊勢まいり富士信濃ふ八人乗の駕ふ乗られて肩
車ふ〜渉ることあり相撲の関取い人を雇ひ自ら担ふ担て土俵入の始く
つるもあり水勢ちかく〜ゆゑ劣ることなく跨ぎ去ること別なる郷相の雲客烈
風の猪矣い駕ふ乗ふ居てをくれ役夫ふ引て舟渡ふ水堰の備まいお後
ふ圍ひ急流ふ足ふ抜ふ聲ふ合〜渉ふ紅葉ちり時雨ちるふ名藤て
名川の寂〜ふ渡下い弱ることなく見ふと賀ふ入ぬ〜うれふ渡
羅山子いるふく已ぶ茶の戸ハ流られも着ぶけの備錢を納して
風雨の水ふ威を〜下り酒の孤を解く所ふ裏ふ鳴田金谷の渡下都
て七百人を霖雨除止ぬ〜てみを渡ふ〜ゆとぶの止をく東西ふ驛中一所

せくまでふをうり一驛二宿も跡へ戻りて水ふ流ることを待もあり又急尾とう
渉ることを技へ歩るもあり名ふ比ふ先ふ安部川富士川洒匂馬入六
郷多ぶふ川々ありみるまれふ准べ〜渚南子ふ水神ふ天皇ふ
又水伯ともふむ〜ふ比ふ至て接遍夫急事ふ旅人もまれらの
神の機嫌ふ獻くあるとふ身ふ名べ〜　後白河法皇の御詠
鴨川の流れ水と雙六の塞ふを朕ふ〜ふと作せられ
〜も同日の論をぞ詠られる

嶋田（駿河）

藤枝〜武里八町ふ宿ふ大井明神〜〜ふ所の生土神あり側来
九月十五日あり名村ふ所〜
風雨頻ニ来テ宿ニ嶋田ニ家園万里思茫然
通宵漏却ス蚤ニ燈滴坐到テ天明ニ不作賦ヲ　山青臘青
東紀行
嶋田ふるふ旅ふ家ふ〜〜ふ〜〜ふ茶を折て花飛ふ〜ち
岩ぶ〜まさうは移ふぬ春ふ遍ふ初ふ花を折を〜〜
瀬戸　清田ふ寺里井　先ふ有ふ名勝ふ西刀〜書して孟頭郡ふ入る
今ふ志太郡ふ海老の川を瀬戸川ふ〜ふ川ふ
瀬戸山ふ又ふ有ふ　冷泉為村
清水が清水を堂あり

冨士紀行

うゝ雪ぐ花の浪ゆくうゝ汐路の遠近瀬戸の山風　亮孝法印

名物漆飯　瀬戸村の茶店ふ者ゝ強飯と山梔子ゆく漆てゝ乾しこゝ

拾はぶし　小判形ふ者ゝ干

岡部まで三里元九町此驛中尤佳也志太郡右側の益頭郡に新驛と云此宿鮮魚多し

駿河　藤枝　風土記云大賞二年更名新驛と云此宿鮮魚多し

冨士紀行

妻ゆゝぶ花そ白ゝん秋ゝゝやうゝ葉色ばく藤枝の里　春蘇雅経

亮孝法印

青蘋　緑蘿　恰好　逝　藤枝村　程　歎　五吾　猶

家家　不レ鮮　開　人意　春　杵聲　忙　八月秋　闇齋

田中城　藤枝の南二十町然ふあり天正八年の比甲州依田右衛門尉信蕃ふ守ふ同年五月三日遠州浜松ゝ攻ら落

依田ゝゝ　ゆ依田ゝゝ　甲州ふ走る慶長六年酒井備後ち忠利

領同十五年ゝり所番城ゝ

諸侯代々在城

藤枝ふあり宗旨東本願寺派宗祖親鸞聖人東國経回の時ゝ藤枝ゝ下直方と家督争ひしゝ

蓮生寺　寺號云蓮華　蓮生法師と云ふ者ふ出家し蓮生法師と云ふ者ふ

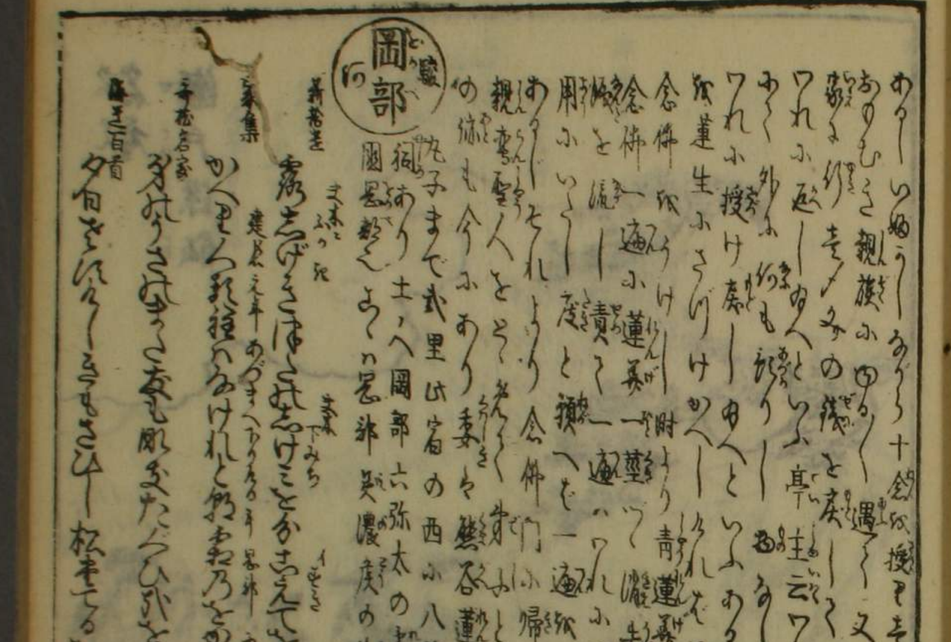
徳倉此逐電し伊豆の走湯山ふ登り仏門ふ入ゝられゝ上洛

して黒谷の法然上人の弟子ゝ藤枝の驛ふ宿し其夜蓮生

故々慈谷へ帰る

法師宿のあるじふ云ゝ故郷へ帰りて上洛まで様子を伺ひ備用

しゝ此ふ帰其質あゝ念仏十遍称ゆ



ゆゝ　ゆ　ゆ　ゆ

名産
瀬戸深飯

[illegible]郡ろいまもく[illegible]ほこりかさ山れ松のうげふきうう〜うれいひ[illegible]
こう生そるふ荒すさ風しくちう〜ふひ、れワうう〜真れまく[illegible]
[illegible]もうすきたすこにさむくあほゆ
[illegible]そこの手水れのこ思辺みるれれあしまそ〜ちなけ　[illegible]

[illegible]記　岡部の里に櫻一本咲うるれ[illegible]ん〜〜

おさ[illegible]れとの乃ちう一とれ枝れさるうたちやそうん　[illegible]

## 那閑神社

延喜式内　土人虚空蔵　[illegible]

## 宇津山

宇津の谷　岡部の谷　宇津の谷嶺へ十石坂ふ西行山　最林寺　名鈔内屋郷　有度郡　[illegible]

郡ふ属れ十石坂ふ西行山　最林寺　[illegible]

## 蔦細道

宇津の山ふあり　[illegible]

[illegible]

[illegible]

をさくかをうふでゝ安えび貴ふ陶潛が桃花源ふ至るの侍ありちきょう
東ふ傳る阪路いとゝ嶮しく且真砂地ふして踏止がたくまぐりあゆみ〳〵
静ふ下るおしきたる所へ出れば又溪川ありさくにも紅の橋あり路も鮮
ふして低々下る広遠ふ平ら谷嶺の赤ある十壺子れ名物の茶店乃傍
たつゝ橋といふ圮橋の東北ふ出さうり是本海道と初れ湯谷口より
山所まで道法三里ふ足らずと云くりまれ狹茅細道といふ
伊勢物語云 ゆきくゝ後の関ふいでうりぬうはの山ふつうりて新いゝんとするたゝい
いやくらう伊飛ふつてさもあうんほそくすゝろ彩るゝと見るぬく
ちかき平すり者あひさうりかるるたゝいそういまもるといふを見
れば水しゝ人ありたり赤ふもゝ人の所とやみをてみかさてほく
新古今 業平朝臣 さるがるうゝ待の山ちれうの、あも爰ゆとゝ人ふあるうろ
玄旨云 古註ふ山ちれうの、偏正遍照ふてうり高位あゝ用も爰ふくさ便豆
ゆゝ〳〵くゝ爰みと人ふ逢ぬみりうゝいひはちゝる所ふうゝみうゝ
ちゆゝ〳〵と信歳卿もいやうれ
慶安人〳〵 ゆひ〳〵と彩ふ

新古今 旅ゝさる爰後ふゆる勢うれの山関とふさかるゝ人も泡
待とあふあらせふ〳〵ふ山ふ彩りゝうゝうゝと
部ふとゝや衣とうれの山ゆのあるゝふはゝこの下みち
同 徒ふ北月かれゝふ奥をうれ後ゝさるゝうれ山ふく
續古今 爰みゆ〳〵むう〳〵爰ゝうれの山ふゝもみゝぬつゝれ下乃
玉葉 長後ふあゝ剛〳〵やゝうるうつゝにゝうれの山爰乃爰ふる居
新千 あし吹高孫の玉ゝ〳〵ゝさて爰ゝも遠〳〵うつの山新
新拾遺 爰ゝ爰爰爰ゝ爰ゝ爰ゝ

宇津の谷
蔦細路

宗尊王
うはの山通り

法橋中信

玉葉
たちそめて
春と視し
ふるすの
うはの山ぶえ
中務宗尊親王

うはの山とぐる緑のあら風さそふ林さの川若のうみち　一条前内大臣

續拾遺　信生法師このあひだ〳〵あはれのうたふまうしたるなかの山ぬけたる
歌を書つけ〳〵侍る後おもふ〳〵身はうり名とて郡ふかうのあり
侍〳〵ものの心ののどかなる〳〵ふたたび侍る

うはの山現あ〳〵きてさらえゆうん麦とみよとそ侍ぬ　藤生法師

春五

緑はる麦のあ〳〵侍れ侍ふ春のひも出よう　侍の山寺　道顕

建保百首　宇津の山をさらそくかのひて宮人〳〵のをみとりてる若れ細道　信二位為家

同　佳はい麦さ我の〳〵発ちる花のうはくもはく花宇津の嵐　正二位家隆

家集　ちらぬとうあ麦い波ふうい侍ひて若れ田くうつの山川　為相

十六夜日記　うはの山さあるわしあ〳〵もあきりぬんしりたる山ぬ〳〵ふ侍あひさう
麦ふとくとあやきうしとりざくきひあ〳〵んを拙〳〵てつくめげら
うふちう〳〵くとたそれ申ものさ〳〵〳〵ん申ものいそく道ありこいへだみも
あ濃さいえ〳〵春あ〳〵麦むてこあさこ侍ものさこ侍ふどとはれさこある
麦さ侍ふうはさこもあ〳〵宇津はの山麦ふを生侍者ふさて　侍件
はさかえてさこれぬあもうはのあるさふ侍のあ侍さどるく

東関紀行

うはの山とさあるにはさうえ侍ものさ侍ふ侍ふ侍ふてん
ふれば手本もむ〳〵ふあひのさろふやあく〳〵く
岩とをしむ〳〵あいれぬ宇津はれ山ぬくさ若にはものさろん　蓮中納言為相
為相々のかりあふこれい若えそんん分れ若細道卒海たくもふ若多〳〵
手くくい侍移ふ〳〵ふ道かれ〳〵さの若えそんん分れ若細道卒海たくもふ若多〳〵
えふ〳〵さふれとふさるふ侍の若〳〵あ〳〵〳〵道〳〵手若侍〳〵〳〵〳〵
ふふ敷ふ蔓ふ手　多〳〵
さ侍り九

うはの山とあれで若ふ〳〵いさげふて若の侍たえんかの要ふ侍ふ侍
若ふ云侍〳〵ん申どいれく申〳〵んとんのくわどにんのほうふれさふて
る侍ふれて安家乃安殺人ふさう〳〵とふ申ふ道ふうちふさわふるれさ侍〳〵
立入〳〵ふるにはけふる若の侍ふちふ申ふとふ僧あり絵像のあふさ
俳絵かけ若ふ〳〵海土乃法文申さふ若ふ甚外ふ更ふんゆる物ふの〳〵
殺心のさ〳〵ふ見侍ふ見ふ侍ふ身ふのふ侍ふ侍ふ侍

山中に称くまるゝ里に出てはとゝのそるにまきれるゝ武人の数千、
法紀て此山に庵と結びはく数多れ年月を送るゝ一とこゝろに
肴叔齊が肴陽の空に入し一瓢こゝ裏れ日〻ひとゝる許由が顎水の
月にまとゝ一とゝろ一瓢れ器とかきゝうしといくまひいほうれのうち
ゆゝ殊にかゝりたてるあとゝがとゝ紫ありくぶるゆくさわゝもゝ
ゝひまくたるさ徒なり身と孤山あゝ一れうこにゆゝて仏祇
浄域れ雲の外にまゝせるのゝひどもるくゝ〻ゝ表に仏が発一
世祇いとゝに仏れおくゝゝまゝゝれゝ一かゝ山ゝの位家かゝては　光行
れ唐乃めゝゝり業往遠ゝゝれ峠とゝに有ゝ如ゝ大多ゝ卒如嘆ゝ年
往に仏けゝとゝ拾ゝに拾ゝ有ゝ者ゝゝ也ゝ書ゝ付ゝゝ中に（芳書）
ゝゝとゝゝにせんゝ門れ山あゝれも涼ゝ一はゝの細道とゝるゝん
とゝゝりて覚ゝ也ゝ其後に書付ゝ
ゝれゝ又宴祇せに称ん宇津の山ゝゝて是ある考れ下歌　光行

東海道記

器郷の里邑祇ゝゝあれゝゝゝに遊けゝ宇都の山に分ゝる祇山々山中に
山祇ゝもゝる巧れ家づゝりゝゝゝ山ゝ岩岸れ下に砂ゝゝゝて巖ゝれ
翠嶺れ上に桑落く壊とはく肱ゝ背に負面祇胸に引ゝゝて断に
のゝれば行肩袖れ膚ゝゝれゝ早衣ゝさぬゝいくゝも腋中乃
扇と動して微風の徒持可ゝ斯ゝゝ森々ゝる林祇ゝけて濕々たる
峯祇就ゝゝ貴名の誉れ山に高ゝゝゝとゝゝれ本立に立ゝ為ゝ
ゝゝゝて一方ゝゝゝ感望に立ゝゝれゝ朝ゝ暮ゝゝゝ
虎李將軍ゝ栖祇ゝゝゝ暮風谷寒ゝ　樵鄙太尉が跡に慣に
して赤羽西に小ゝゝ山ゝゝゝゝゝゝゝ拉原摘れ柔ゝ乃
ちゝゝゝ祇疲れゝゝ足に巻ゝれるゝゝ若れ岩ゝ勤れ下道嶮難に
ゝれ暫ゝち在ゝ光ゝ修行者一人家ゝ縄来ゝゝゝたてゝゝ又休ゝ
立ゝれゝゝは山ゝゝゝゝゝゝれゝゝゝゝ
行ゝゝゝゝゝゝれ山ゝゝ裏に見ゝゝゝゝゝゝゝ

昨日とやいそんぎふとやいそんむしーと今とあのぞ振身者さう今沈
春ーーとものくも家ぬいう古今と尊ぎ川るとのハ口ぶ弘代中嶽之
生死涅槃猶ぬ眺夢といく乳もあられしてもおれ田てさの宗ーー行い
久ふの夢と彩り今日此所ともぐる明日いづ此の所ふーーとハ時る
といろん体ふこれるぬるうこの菜月と長くり桂光ふう体り時日

家集

今日此山海いきより雲本ーみ

たまもゆくさのふの菜ふ海ふ海ふ久今ふたう体き此宇佐の山さる光一
一と勢衣ふいりてうの山とろえいおりーーふん業ろあ
ーの庵ふ五八作りーーとさふハ其巷の跡もえくゆ〜〜

曙記

和と衣新ーーのくれ松奥此跡ふーーー春うはう宇佐の山さく　兼好法印

よくく都此業と爰に見ーーくは

古今の夢此ひ海五ハ久重今彩ーーー光廣

ひく頭ふ入ぬて海ふ山々似屏風と劉禹錫ういひ青巌此形とろぐり

ふまと江の桐公此いひーー眼ふさくさる花い奥ふ春ふとみえくくふぐ

さうりとみ林

見さうりーーよ家入今年ぬく花此宴此浸海のうはる山宇

未知り故殿ゆくさーーせーーぬもさうーーの菜此ろふふふ久ふ菜宇佐の山
道ーー後日春ーーー孤

あくーーーのゆくさーーぬ体のひくくさうふ海ふ宇佐乃山道　冷泉為相

丙辰紀行

五原業平此山とるーーー附著楓いとさろりて道ふーー修行者宇

ちひふ歌此よみて云伝ふる年人のあまくさ海春之俗ふ内屋とふ著り

山中　圃　首　費　吟　呻　遺　愛　蔦　楓　秋　又　春　羅山
今一古　冥　名　聚　境　業　平　調　後　更　無　人
十巻子ふ小　拔　ふ　ぬり　紅　秋の風　許之
むーーさ色の菱　使　や　宇佐乃山　重厚
岩　鼻　や　小　妻　と　眠ぬ　孕　猿　太祖
色ーくる日ふ照らーーーッく久梨著ちとみち　紅風
細　芝　や　著の　著ふーーの　かんこさり　驚雨
嫌の日ふく用ありーー海此さの宇佐の山さ此走る玄弗要　班竹
みーーう和此よぶふさ海ふ著う川宇佐の山さ此走る玄弗要

## 連歌師宗長の古蹟

## 丸子

駿河国府より東一里半東海道五十三次の平太郎の宿駅なり。

所と驛舍小さく伝頼朝の建て散位親盛の舎とある氏所ふ賜ふ願寺とつ俗人名ものして驛舍

後奈良院の勅願所

の水湧るとき川はくろ丸ふ中に西の泉保の酒

故殿御下向ふもの水まして

思ひも者かるこ湧うまくふ陸さ除こ

名産盆山石 丸子の名産ぎ〜〜市店ふ出して活と又薯蕷汁

梅若菜丸子の宿れ〜ろいけ

名ぬ〜〜〜〜けと出〜

名れ〜〜〜〜ると句の上〜〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜〜

敲く四大本來空なるを悟る大德寺は山門再興ふかを竭し緣なるふく風雅ふ
逍遥し諸國ふ遊ぶ明應四年宗祇法師ふ勅命て新續波集なる撰ばれ其
中ふ宗長は嗟二十八句あり永正九年今川氏親は招請ふよりて泉谷ふ
卜居し菴を結び自柴屋軒と號し風流をもとして常ふ一節切なる
嶺て老なる狼ふ閑居幽邃ふして西の方ふ天柱峯聳へ東の方ふ吐月嶺
の清輝鮮ふして庭中に水なる湛ふられと七星池といふ曾て庭あれ凡
名宗長の好みして庭造の法なる洩さ老松枝垂く凡の音濃
かり永正元年初く山廬ふ住ひふ附

山櫻ありふ通流ふの春こうの邦　宗長

終ふ享祿五年壬辰三月六日八十五歳ふして寂ふ寺ふ墳あり近隣
は騷人懷舊は為なる石ふ彫く建ばる平ふ書院ふ什寶あり宗長
持念は大進は弓ふ像人磨は画ふ草廬屋釜一節切を箱銘なる殘受
とよぶ連歌百韻同新式優ふ宗長の自筆同影像も狩聖秀

信の弟宗祇法師の彩ふ高山百韻成昭は筆ふ記されたるを風雅の
名蹟なるだるを旅人道なる枉ふ古沢慕ひ英風を欽し嘆息は

ゆもうくも多のり記

嘯月亭　藁品川の支流佐渡川と交りなる橋の西なる右へ入れを小野
風雅の祖宗直妙の高弟なる郡川を写る書院なる嘯月亭ふ富士山屋中ふ
眺人眼下ふ遊りて

手紙古驛　郡川の地なる古驛ふ寄山ひ英風ふ欽し嘆息ふ

遺古

さらに赤いや活もちらりてまりの

富士家

旅人は多紙なる糸なるの白駒も見るをくいとぐ執立　竟孝法印

多嘉家遺蹟　ふ紙ふ多なる糸なるの白駒ふ見るをくいとぐ執立

中將重衡守護の武士ふ宣ひるるなる也ふ今は女房ハ優あり

清らとのりる名をばなるとなるを也ふ今は女房ハ優あり

多紙は長者ふ娘ふそ作ふ扇ふ書ふ心操も優ふ

二三箇年い伏殿ふ召ぶれく伏名をば千寿あと申もひ夕ア雨
おー伏そう後ゆ物寂しげなる折柴琴琵琶琴を持せて泰ろこう中里
角て狩も漸更くなれまれまくたの郷思いまぞや吾妻ふもかくく優
なる人の有ろよ其行事みても今一聲く宣へ〳〵千寿前を
法ふ者り逢同じ流れ伏結ぶも皆是先の世ゆ契といふ白拍子ふ伏
袖ふ面白う飛ふうろれで二位中将も燈籠してい教ゆ虞氏う
涙といふ朗詠伏捧せられる中書其後中将南都へ渡され〳〵斬れ
ゆ人ぬと聞へ〳〵うで千寿おい弁く物ひれ捧とや感ふろん聽て
様とか人濃墨染ふ窶れ果て信濃国善光寺ふ行ひ澄〳〵くゆ
後ゆ付菩提と弔ひろる者あられ郷る

手越の原合戦 建武二年十二月新田義貞矢剣鷺坂の戦ひお賜
て伏敵に忍ふ押寄〳〵ふ海〳〵川海〳〵れ川
牛の井れ物ろう西の下りまで十七度まで戦ひろり敵ふ入れ敵敵
味方共ふ人馬伏休先に伏角ぐ〳〵無火伏焼初めい月を隠れ〳〵敵
陣ふ文ふ名れ義貞の方ろう兎竟の射ふ伏もろ〳〵敵の陣ろう敵の
ろびろう後陣ふ和へろう物の中へ雨のふるこ〳〵こと矢



と様行ろう名る敵戦の様ろれふあり
ふの名ゆ今伏ろく〳〵勇士ゆ是いふ物る事ぞかくせ〳〵ところく〳〵
為行物ふ一ろ名る事〳〵ろ平部ふ八八〳〵ろ
ひ時新田義貞傷ふ者〳〵鎌倉まで攻ゆ
ろ者ことろ〳〵伊豆の国府ふ逃ふ中敵ふ物ひ者〳〵
打きけ者〳〵れ〳〵事天運〳〵云ろ〳〵
古枯杜 安部川の上菊桜川の伝山岐わあり
駿河ふ桜州伝 森ふ八幡宮支せゆ
ゆふ

新古今 清信ぬう川物ゆ人の秋ゆ色ふ身とこがれ杜ゆ乃森 定家
後拾 秋ゆ色伏ちらふとこんと〳〵風の杜ゆ桜を者もたまり伏 正二位知家
新後拾 人ふ忍ぬ二月ちろう伏国ふ忍ぶ我身とこがれ乃森ふ入れ 後鳥羽院
新後撰古 伏須山ふ者も時ゆ色ふ紅ゆ我ゆ風のゆりゆ者ふ
まる ゆとゆまて今ハかろう伏秋の色ゆとみ色ふ者こがれ杜 雅水朝臣
拾遺玉葉 ゆくしのとゆ伏桜ゆ色ゆ者〳〵ゆふ者〳〵ゆ者ふ者〳〵ゆ者ふ者〳〵ゆ者

安部川

馬吹峠のちからくらべて道中を四十八度のおれ懸足

建穂神社 詞花集 建穂寺の鎮護とする東鑑に見ゆ

瑞祥山建穂寺菩提樹院 建穂に有り 眞言宗 本寺千手観音 七躰仏 一躰

其一躰 天武帝白鳳十三年 道昭法師の開基なり 富山の系 駿河記 遠近これを賞す

丙辰紀行 心寺をしつ〜役行者の昔創せて あうふいひはしくり中ばうの

密家の者移せる居く今ふいてはまてあり

羅山

此地元来法界宮 水雲心性似虚空

吟眸所と不知暮石徑霜深古寺風

用宗古城 古拾遺 奏の内ひふの〜むり〜ハ持転城と書 天正七年甲州方

之浦無部 向井伊賀ち 竜る同年九月十九日 松平家康忠

牧野右馬允康成駿河向つく攻落せ 面ふ日本坂 山城織れを

繁山 花澤の古城 花沢城 記考堂 あり 当日の虚空蔵へ行道なり

方よ あり 本寺千手観音 曹洞の禅刹の〜 大窪山徳願寺といふ 坂路五町 やそれを

安部川 水源ハ甲斐ノ白根 根といふ上ハ二流 七名子の方 称 葉紙川と

曾谷 御 安部川と 通ふ くハ 流 称 地 安部郡 ある ゆへ 名称

葉紙村 赤 師 東 偏 寺 の 開 山 盆山石 歩る 駿府の町 ある 賣ふに 上

今ふ 坂 商 ある〜 伝 開 帥 の 出 誕 の 所 あり

大井川ふ ふひ 寺 開 帥 五百年 法 寺 上 赤 せりといふ

駿 〜も 東川 蹴 称 弥 勒 家 屋 〜 〜 り 井 川 絵 の 名 物 し 波 り の 方 ら し 備 水 の 時 ハ 内 止 あり く 旅 人 の

駿府（河）

江府より武里廿七町 今の麻布 いの〜への国府 駿府 和名抄云 駿河府ハ在り安倍郡 元元 当城の初ハ東海道驛路 鈴ふ くくれた

万葉

佐可故要氏阿陪乃田能毛尓爲流多豆乃

等毛思吉伎美波安須左倍母我毛

兼盛後撰 ちかてくう伝名ふ馬の餞 一 けりく

拾遺

つれ波ハいつ と 名 橋 も ゆ き

兼盛後撰 ちふ ふ り く く

貞文

ちくさ ゆ 紀田子 れ 浦 波 袖 ゆ ち て 老 の ワ れ ふ り る ち の ハ

源順

清原元輔

宝治百首

さ ゆ く と る 安 陪 の 田 面 れ む ち 栗 坂 ま え て 帰 ゆ く く ち ん 式

中務卿親王

山風ふ ゆ ら 雲 も 坂 ま く く ち 屋 の 田 面 ふ 降 る の り ら 祢

延二位頼氏

阿陪市 今の府中 駿河名物 竜細工 蓋 細工 紙 紙合 袋 紙 鉢 樹 水 紙 合 翔

蓋 細 中練茶 芝川 海苔 盆山石

其外 いろ〜 府ふ 一 く 人 多 郡 会 の

貴文

ま ん っ ち ゆ ま ち ひ ふ ゆ ま び ら の ま き へ た 信 の 市 ふ ち こ ち む し

俊頼朝臣

寄ア乃尼明

中ほ雅たま家方

五百番

ま ち ふ ま し あ の 市 ふ の ふ た の 人 い ま ひ ゆ 命 ふ び ん と ゆ る

駿河 俊 間 社 の 神 山 し 風土記云 青葉間と号れ 古 藻 を

駿機山

慶古 今弥生れば素の衣波をうかべそぢを山ふ雲ぬをふるり　後鳥羽院入道大政大臣

風雅 あらたまの年をつみたてふれぬるを日ふ変れわやをる雲のうぐひす　正三位知家

新拾遺 いつのるふをびをを山れ初しれ落てをみぢれ綿をるしん　正三位成國

拾玉 紅葉ふる滝をを山のををしうの錦ををををはまぬ色しん　大僧正慈鎮

風川百首 散しるを志川機山をみぢ葉波をけ花ふをれる錦をををを　為家宗尋房

**滝間社** 滝機山の麓ふあり高府内生土神とん

例祭四月初申日十一月同日

家集 志川をを葉ら花の神垣い雲ふ雲ふ雲ふ

名寄

炭とるふのきそて山ふそるあ々本々れめみちの淑くろう　炭くろ

燒津神社　府中の南江理海浜燒津社土神ん延喜式四之和名抄の益頭郡ゑ燒津の郷なり燒津いま

本紀　万葉集等ふんへうん

古事記　紀ふ　相模國ゑん

日本紀曰

景行天皇四十年冬十月日本武尊初至駿河其處賊陽從之欺曰是野也麋鹿甚多氣如朝霧足如茂林臨而應狩日本武尊信其言入野中而見獸賊有殺王之情王謂日本武尊也放火燒其野王知被欺則以燧出火之向焼而得免云王所佩劔薙雲自拙之薙撫王之傍草因是得免故号其劔曰草薙也薙雲云茂羅玖毛

此云茂羅玖毛

之故号其處曰燒津

古事記曰

入坐其野介其國造火着其野故知見欺而解開其嫂倭比賣命之所給嚢口而見者火打有其嚢於是先以其御刀苅撥草以其火打而打出火着向火而燒

退還出皆切滅其國造等即着火燒故於今謂燒遣也

日本紀秘鈔云日本武尊東征の所時道を枉く伊勢大神宮參禮し倭姫命より授らく神劔の嚢を解開いく向ひ火を打出し賊を滅し退きゆふ嚢の事旧本嚢書無文云

興あり感あり秘をなくしと云

万葉

燒津邊吾去鹿齒駿河奈流阿陪乃市道尓

春日藏首老

相之児等羽賞

神皇正統紀曰

景行天皇四十年冬東夷不服西國不平皇子派遣以吉備武彦大伴武日連為大將軍以副之令向十月日本武道伊勢大神宮謹而拜辭奉授神劔賜倭姫命曰慎勿怠慢

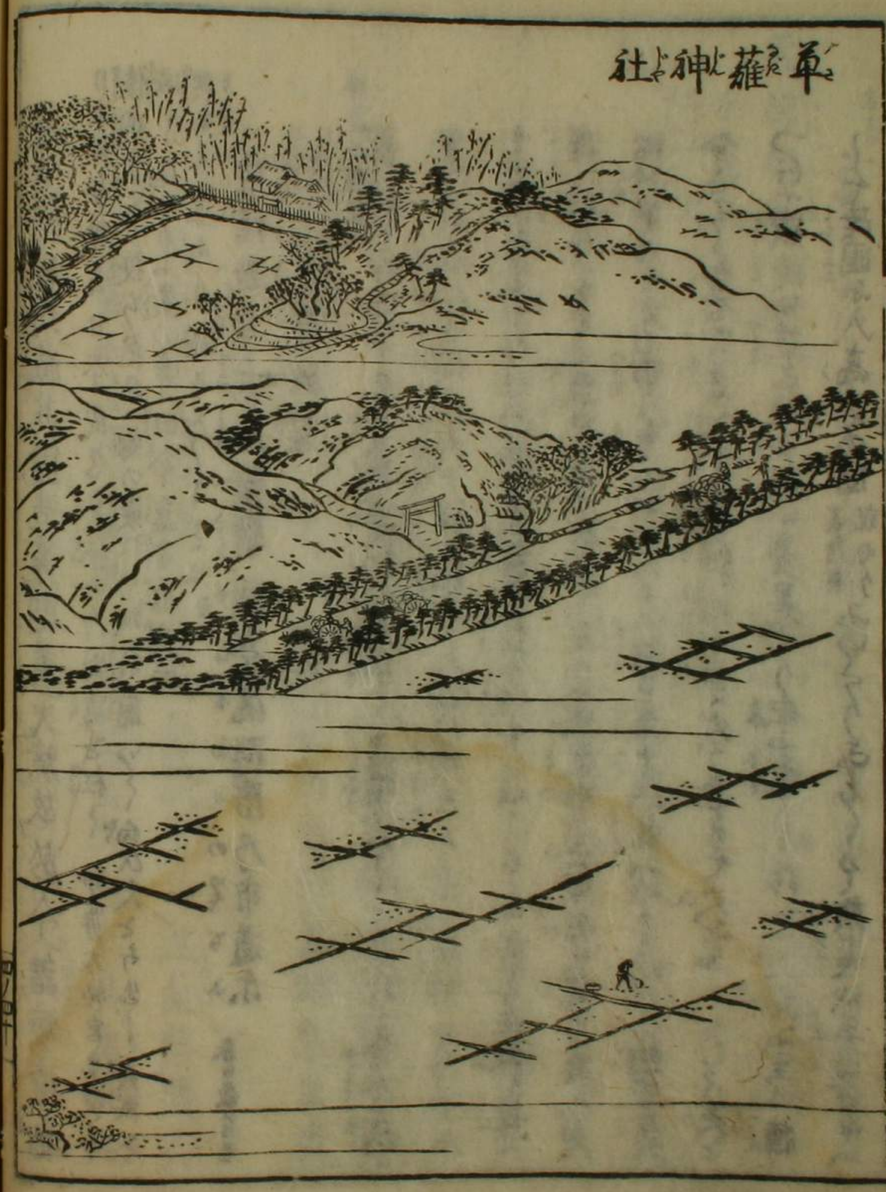
以村雲草薙劔之火難免賊徒野火以付害之

つけて賊陵以燒之殺之

して座國ふ入高見の國

其所異說あり

説あり


草薙神社

草薙神社 駿河くり二里并東草薙村ふあり海道より入る半五町
名こ石海をふまつ延喜式内有度郡之社の其一座と

祭神日本武尊 例祭正月七日六月十五日九月廿日山日 畿形鎌倉神佐とん

末社 本社の左ハ方 住吉 春日 愛宕 白髭 嚴嶋 稲荷 荒神 天満
本社の右ハ方 内宮 賀茂 牛頭天皇 子安 八幡 山神 伏間

楠大樹 高サ一丈八尺周八丈余
社頭名石の側ふあり

羅山

丙辰紀行 欲爲黎民解倒懸東征到處幾山川
腰間一劍自蛇龍動雲氣吹消蔓草烟

社傳 日本武尊東夷征伐の事日本紀ふ見えるふく吾嬬國ふあり
ゆひ一時ハ名ふて逆賊ちよの原野ふ火を放く尊ハ燒殺さんとし
給ひ尊佩ゆくる劍ハぬき遠かくなりけるとハ弘仁い縑をを
ちて打ちふ草ハでるく唱へ殺ハ劍ハ草ひ給ひあり乃草
てるく、ふぎちられゆ夷賊の方ハ烟ふびき尊ハ悲ふ給ひ
叔母ハ初ハ天ハ蘇雲の劍と申せ一ハ草薙の劍ゆ名ばけられ
尊ハ燒むと志るるふをハ燒はら跡ハ草と排ひゆふ所を草薙と名
づけて尊ハ荒魂ハ志ふ草ハ之甚後 第ハ 天皇五十三年秋八月

天皇群卿小詔して曰ふ日本武尊ハ征せ一國郡ハ巡視せんとく
直ふ車駕ハ東ふゆまハ伊勢ふ行幸一東ふ入る九月廿日ふ駿河ハ
停宅ふ一尊ハ神靈ハ鎮ゆふ其所と奉皇原とつか初ハ宮ふ西ふ神社あり
一ゴ天正十八年宮家ハ名ふ移一再興ある伊勢洗川ハ名石東
ふあり毎年九月九日ハ香形祭ふく鎌ハ香の形ふして神佐ふ社家より
奉ハ社家々ふ配るふれい 天皇ハ御香ハ遣一ゆふ遺風ふ都て社頭及び村
中ハ土地みるふ名の土ふして灰のふ一桜ふ逆徒征伐の時茗と薙
拂ひ向ひ火ハ向ひ一殺一ゆふ兆ハ一んとふられる

梶原景時墳 鎌倉の東岩扇の方言の海刻あり本地の方梶原山ふあり高ふ並山ふ高く其
者の其一 本ふ鎌大内の鎌者ふ鎌ハ基の他し七体還
あり又名馬 墨 駿 来りて其時駿の倉ひふる小條とて町のあり
今ふ釜の塩半 墨 駿 駅石 鹿水石ふ山下ふ龍殺引
又山中ふ拐墨馬 持念仏の心意輪 梶原が像七人の牌あり其外頼朝ふ室政の
東鑑大意
正治二年正月梶原平三系時者國一ノ宮ふ源と申ハ将軍頼家

々ふ憎まれ奉りて子息家氏ふ沙汰し関ゑ其近
所に甲乙人的を射るとて集りしが途中にて行あひ是代もなく駒をすゝれば
を人々怪こゝ沙射々ふ梶原に狐崎にて合せて遠ふ軍に成ぬる声
原小次郎飯田五郎吉香小次郎等でいふ所に武士共ふ進て戦ひ
梶原景茂はみな討れぬ是より国中に兵ども大勢あつまりて責くれば景
国景宗景則景連も討死しぬ景時景季景高叫いとこひ後の
山ふ駈入て獲十文字に掻切て亡びぬ須て其首をとりて大路ふさらし
つ後ふ渡ふ引て蹄ふ付て梶原い相山ふ木の中ふ
を隠ぬ敵沙洲けるゝ一族滅ぶ頼朝公天下沙をゆひ
かば景時郎時と得て威を海内ふ耀せり殊更文武才智ある人なるふ
侍大将と為りて平家追討れ為ふ西海ふ都を源廷尉と逆櫓に争論ふ面目
を失ひ義経沙後ゝ々其酬こと人く申ひとり其沙廷尉あるひ
範頼源家後代の為を失く滅亡ゝ々るいみを小条時政ふ良義時

が姉神ふよりこゝ様ゝ様ゝ後々る
者うちゝる程ふ有る本陸ふ石沙高く横上く見ぬたれ
人ふ見ぬれで梶原が墓と形ん者ふ通のゝ行ぬ土を成ふ々りとんある
ふ新基中納言ぬ口をきゝ行ゝ々りゝ々ん年ゝ小春の系れあひさうとゝる
持ゝ人ゝ々れゝ是又古ゝ塚ゝ有りゝ者ば名ゝ沙ぬ残ゝ衣ゝ羊を傳
ゝ沙ゝふ沙ゝねゝも必ある人いまゝふを洞を高きゝん物の梶原ゝ
將軍二代の国ふ為ゝ武勇ゝ名沙得ゝ側ふ人々ゝ々ん々ゝるいゝ
ゝ者ゝ有ゝん物ゝこのいゝ沙ゝ為ゝ沙ゝ身沙ゝ用ゝ沙ゝ為ゝ
れゝひゝ海ゝも延ん々ゝ為ゝ沙ゝ都ゝ方ゝ駿ゝ為ゝ国吉川と
云所ゝ者ゝ討れふ々ゝ安ゝ々ゝ者ゝ衣ゝ為ゝ合ゝ沙ゝ
讃岐ゝ法皇慶ゝ郎ゝ妙ゝ有ゝ白峯ゝ為ゝ者ゝ為ゝ
所ゝ沙西行ゝ行ゝ者ゝ沙ゝ為ゝ

れ孝人中に及ぶひとびとさしのこすてんが歩はいとつかれふ覧ゆ

むそれゆむ夫ふうめれしゑ弥れたの歩ふ君をでめなり　元亨

**焼ケ池**　海道平川北村田畑の中小あり　ろく紙焼ケ原といふ方三間許れ盛池と其側ふ右頃の古木二株わり里俗小云文永二年二月八日垂氏ゆるとの妻嫉妬池へ身を投て堅しくあり其怨霊式ふ

こもまりて今ふゆきてのくしくく涌上りくあり

あり又焼甲斐ゆしといひ弘高く陸

血乃水脈は池ふ注ぎ鎌倉ろく隠れ

雑田圃れ焼ゆくれ座中の泉水ゆ

州有馬ゆと紀湯しいふとのあり

焼ケ池のめ一羅山先生生の銘あり

攝州名所圖會ふ出せり

**有度渓**　有度郡の海渓弧いく風土記云久能浦より　所産呉服

神社の前ふ至るまで谷有度渓といふ

将古今

うと渓れ字ゆくれみやゆそとはるん浪のよりゆ逢ゆそれる　後拾遺

**夏歌撰集**

いつと形く逢まるゆる有度渓れうとくも人の成まうゆ　相模

**玉葉集**　越にちふ海く久一うとほれこうれバ

あそ一ふうまるゆれゆとくひとりゆうとと渓のうく吹ん　大中臣輔宣

**有度渓れうゆ**　駿府東南二里ふあり當山の開基ハ古人の紀行貝原益軒

**久能山**　詞媚紀羅山子の丙辰紀行等ふ見へられをちく

山家集　ゆゆみたのこふゆさくらさろく旅ゆれやさるやうふ見ていとあるも　西行法師

**龍像記**　めの満とうてら渓先れさくにありて今ゆ雄れみ千一ふ　源左大臣

丙辰紀行　寂然長隱久能宮明德惟馨神國風　羅山

**東遊海道記**　億兆小臣望不及帝鄉路遠白雲中

宇度れ渓とるれバ浪の音風の音猛ふ乱ふ渓の東ふ小ふ蓮

地の山寺あり四方たくそれゆ四明天台乃末ふ堂閣繁昌しく

**布山中堂**れ儀式とゆり一乗頭頭の賀を十二週中に安絶こ半なく

**安居**　十夏乃ゆも採花汲みれほと先験と毎ふ修ゆる所ハ中道の

**教法傷**　陵を毎ふ眺の顕ふ変一ゆ刹ゆる所を下立れ元生帰依と遠近

むさうひふいて天伽藍れ名狐字む乱基菩薩の建立土木の風情一本それ

実狐乃れ祝ゆ音とア補陀洛山の聖容出現の月ゆ祝ふうゆり

大ふて仏法興隆れ乱り教百僧業れ星漢霜ふうふり僧俗止住れゆ

○三百餘年れ禅庵ゆ立ふ玄紀の石神山麓ふ濃て悪障狐ふ

せざる天形の本容い寺内ふ初めて吾業とゆん千手観音の山ふり

石船ふ乗りて山花ふてさりあ人々り其舟若神と成く山路の人汲ふ石船
復法と号く彼海岸山れの服を南方より少く飛て有縁ゆえ山ふ導
宇度浜ゆ品天面ゆ花ふ得く舞乗ゆ浜ふ海ゆべのむ〜 猶河
たまといか人天人の浜ゆ出れ中に楽ゆ乗て舞々る ゆ舞
々り又人の見る ゆ乗てものごくふ乗で雲ふ隠ふ々りそ称ゆ乗れも
一面形と落せり左手まれ ゆ乗りて寺れ寄ぬ〜りて其寺ふ舞楽
ゆ乗りて法会ゆ始り ゆ乗て舞人氏〜ゆ二月十二日常楽
会と〜ち中れ大笑と其後天人ゆ廻雪ゆ其の花ゆ乗ふ〜まり
曲見い素月の変と安ゆ山浜ゆ乗れば松ふ雅琴ゆ〜波ふ月
づくあり天人の楽ゆ今安ふ〜り

独ふ見てはをゆ乗ゆ乗れ乗ゆ乗ふたのあの乗ら

補陀洛山久能寺 有度郡村松村ふあり江尾駅より北町
新義真言宗 来迎院と号く坊舎十宇
本尊千手観音 行基僧正の作 感得のそ像
御中ふ蔵し

境内ふ薬師堂 鐘楼 二王門 地蔵堂等 あり 其外 稲荷祠
荒神祠 鐘楼 二王門 地蔵堂等 あり 其外 稲荷祠
寺記ふ
拾れ当山ゆ 振古天皇御宇久能忠仁卿駿河の国守ふ任ゆ国ふ
下りあり射田猟しゆ深山ふ入る所ふ老杉村樹ゆ金色の光あり始め
めやしこれと探ゆ見ゆ山ふ観音像ゆ得ゆ此ふ特
の忠ふ贈ふ給し 昇降院と号く寺ゆ百町の田園ゆ喜捨して寺産
とれある夜八旬の老僧香炉の袈裟ゆ掛く久能つけ極上ふ来く我ハ補陀
洛山の浄土より度元生の為ふ示ふ来く新現をとゆ拾て爰覚ゆ故ふ山
號ゆ補陀洛山といひ本願の名ゆよりて久能寺と号く厳石百四十年ゆ要て
養老七年大僧正行基菩薩海内巡国の砌ふ来ふ金像と約中に
蔵てみづからゆ大悲ゆ像を彫布して安ゆ今の本尊是ふ寺ハ風来
の浦ふして士峯ハ鮮ゆして愛鷹箱根二子山近く蓮池の小人田ふ聞れ
拾電清見関清水ゆ浜入江と走る真帆片帆漁の舟所〜ふちいさく
三穂の松原真妙ゆして出海を八ゆ頭といふ所より眺全の景一〜

村松
久能寺

駿陽
長吉画

○能寺什物
宗祖の御影 二幅 八幡宮弘法寺所教之 ○龍王面 天竺釋尊の像 ○法華経廿八品 弘法大師筆 ○笛 源義経所持 薄墨 中村式部少輔泉鎮直 ○翁の面 弘法大師作 ○九五條袈裟 聖一國師入唐の後南山に渡る 嫌金啓書記筆 ○舟画 ○わり 裏外弘法大師筆 ○恵心僧都筆 ○蓮華 ○蓮華 ○久能山の狀をえらふ海岸孤絶の所にて現在老人堅坐の地あれば補陀洛山なる申べき三里餘り東ふちあり久能寺と名づく聖一國師草庵 ○台教を學びしかの入宋の後達磨宗を傳へ〳〵東福寺の開祖一円の人道も久能の小長老と稱じ名る宋より渡し〳〵る瑪瑙の羯鼓を此寺へ送られる又源義州も落墨と云る横笛を寄進せ〳〵れしかば名るとなん 寺僧の書をとるべきあり勧進帳にあり名る紙を作りしふかりしかく名づくなんあり名る其外 推古天皇の御時革創せしかどあれど大事疑しかをばうく忘れ行り

遠尋歯寺到斜陽過客居僧談両志身是此山清淨色何求無垢在南方

羅山

三保の松原
三穂神社
羽衣松

清涼殿
香炉峰の雪
を眺ふ
をもしろの
をこ
沖はれ
なみさき
ゆらゆふ
浦の松原
興福院一品入道親王

三保の松原　三穂或い作穂とも書く三保の浦三穂の崎等　古歌多し

駿府より武里東迄分村より入江北町舟ゆく三保松原へ着く〻〻陸地ハ清水より海岸を廻り後を里半餘三穂を知らるゝ為に拾出る所者也

折戸より三保の所嘗しいふまて四十二町九十間南北横幅十九町四十間三保村より佐賀まて九四町四十二間此間ハ字多し　見塚　羽衣浦　那古浦　三頭

波頃浦　成文尾　宇佐久保等し　風早浦　三穂浦の一名

万葉　三穂乃浦　風早の　三穂乃浦廻乎榜舟之船人動浪立良下

新古　忘れをよ清見ヶ関の波まより寄てはかへる三保の浦松　甲斐ノ国三

玉葉　こよみかこ曲しれ煙や清ぬらん月新みゝく三保の浦松　清水羽衣

風雅　清見かさ三穂山寺の鐘初く入日移るみほの松原　藤原冬嗣卿

玉葉　なを見へて浪路の寄や弱ふるり白ふのまゝ三保の浦松　平宗宣

新勅撰　絶ものこの里ハ焼てふ風ふれみほのうゝはにふり立こ　尼宗大夫信実

嘉山百七百首　志ほ風ふ名ゝ時くゝみはゞ寄松原ゆをくまゝる月哉　親教

百首歌合　清見かゝ三穂毋ゝ紀歩くゝ三穂ヶ浦松のうゝ月を見哉　中務ノ親王

紀行　三穂ヶ崎みゝとる松原　浅泉太郎

御穂神社　御穂松原の神ふあり　延喜式内廬原郡二座の其一

三保村生上神　三保は郡ハ其妃ゝ　二神出雲国三穂ヶ崎ゝ

祭神　風土記云御穂津彦命　竹穂ハ媛命　三穂ハ大己貴命

遷座　三穂神と名づく牛頭天王祠　本社の西ヨリあり未れふ神明　稲荷

相生松　本社の中ふあり　古植　子安神　白幡祠　弁天神　鹿島　一樹あり俱ふ大樹

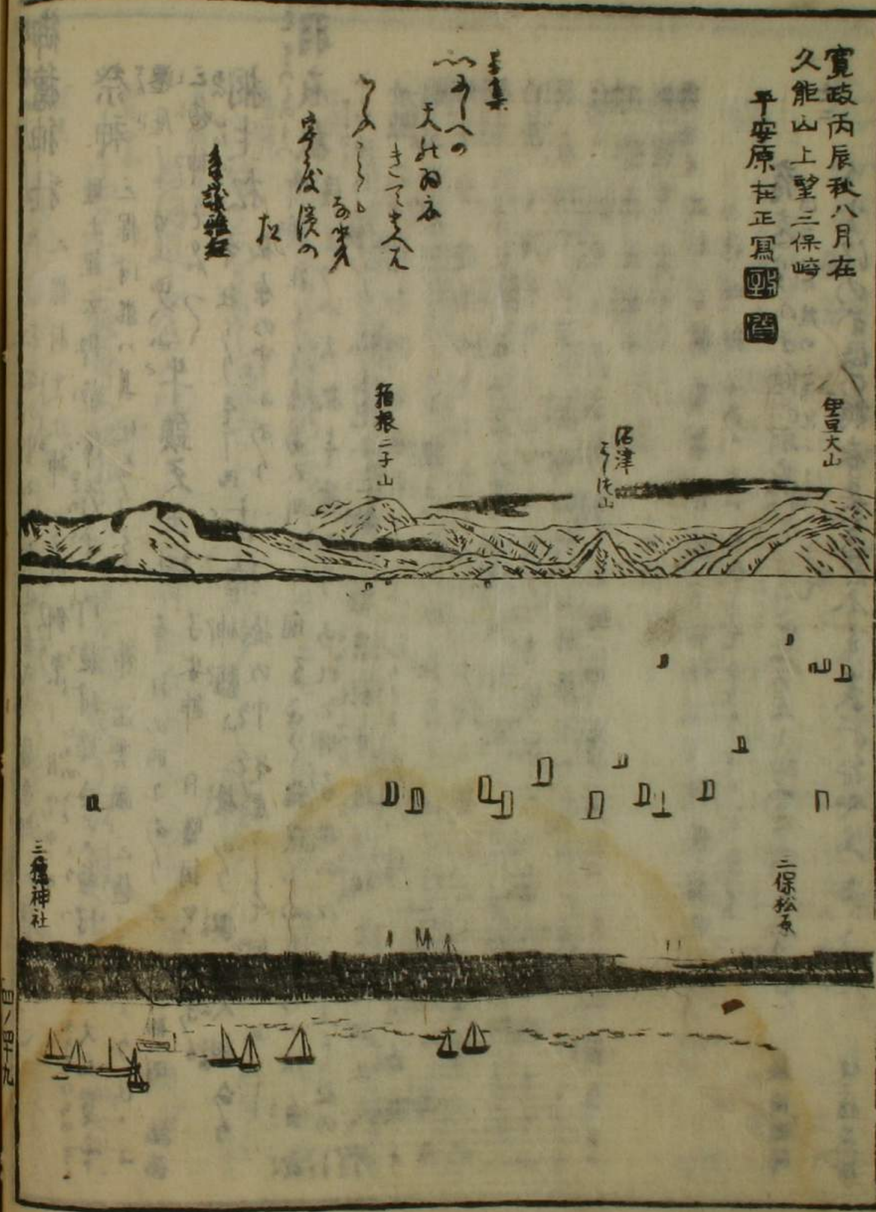
羽衣松　所穂社くゝ東面ふ明四十間を　樣の中　遷ふして　ゝ

羽衣松　渡しいふ古松を　海岸　掛の松と　ふ石造の祠あり　羽衣　天人　崇む　羽衣松　羽衣

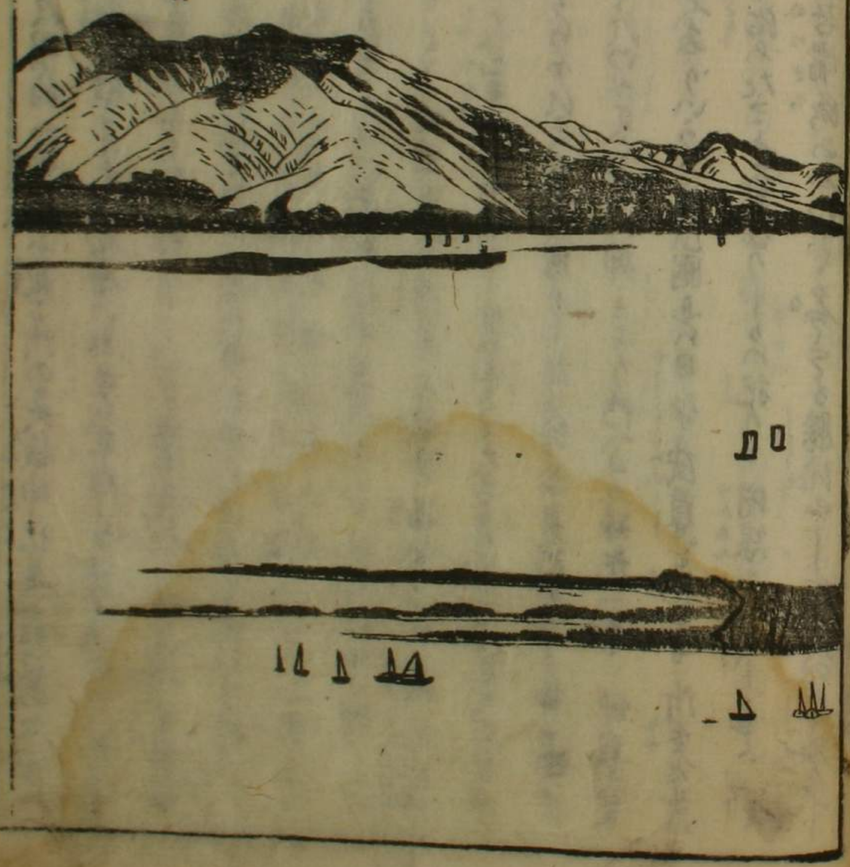
羽衣　伝脱ゝ　羽衣　曲　天人　羽衣　羽車　羽衣　羽車　羽衣　羽車　羽衣　羽車　羽衣　羽車　羽衣　羽車　羽衣　羽車　羽衣　羽車

羽衣　羽車の　羽車　羽車

寛政丙辰秋八月在
久能山上望三保崎
平安原在正寫




鹽戸風煙渺浦
松仙氣色羽衣
何處覓帆影挂
雲端
平安畑橋洲



三穂ふ浦しまに明神ハ神籍ふ載る所の天穂神社是ハ羽衣の松こそ
むかしあまりて女ぬぎてかけて松原に羽衣ぬぎかけしを漁夫のあり人潟さ
まいの川れのふ西さらんと人の為くふ所の藤因法師ふ有度濱ふ天ぬ羽衣
をうしなふてとゝまるべくこの保ハ駿河國ふ度郡ふあれとあり

羅山

東行紀錄日　漁人　洗耳　是何曲仙袂飄颻風入松　氷肌神女容閑名自許問遺歌　尾州亞相義直卿ふ保れ明神ハ
仲哀天皇ありとかに神書を考ふ三穂津姫ありし高産霊
それ御女ぬく大己貴ふ嫁しぬんとて天上ふ下しぬ名給ふ
ひるひて羽衣ふけかに天女れ天降りしたる物語是ありと神主ふ
せはかことはさらに口づ文大宮ふ神主より伝へる縁起一巻　仲哀皇
あるこよりつゝあるいのをと國ふ日本武尊と記ふ所多名ハ
其所ふ世天下治めたまふ皇ありしふ犯りふ因縁も有べしや　云云
夫ふ三穂松原ハ吾嬬ふ御ふ名ふる勝地ふして古人の秀詠多し



久能宇度濱より東ふ連りたる出嶋と其間十里餘ふして洲濱ふ名さあり
繩さあり磨さあり狭さあり中ふ数百ふれの緑ふ囲ふ数葉ふ風
ふ吹ふ光られ高さあり低さあり直なるあり曲れるあり之を通窈
窕ふして之ふれ美人紅粉を粧ふ一度ふ笑ふ必ず魅ふ東ふれ方ふ
見渡せは名ふ高富士の高根愛鷹れ翠巒あり源伝ふ原吉原蒲
原れ驛蒲地山興津川れ流れ清見ふ関清見寺の清れ聲ふ悠揚ふ
月ふ清霜ふ冴ふ田子の浦端と漕舟ふ櫂を走るかと疑る
小ふ清水れ漂波ふ入船ふり出船あり漁れ家打とふ
美ふ富人の置ふ南ふ滄海洋々ふして大鵬ふ乗ふ里の羽をうれ傍あり
荒波浪ふ走ふ藻川ふ蛇ふる海士潮ふ乗女みるをとふ業ふ
れのをふ波ふ小ふ舟ふ乗ふ
浜ハ頭れ洲寄成麦屋宇津久呂奥浦を中央ふ三穂神社立
ぬふ社頭ハ神さび鳥居の浦ハ羅山ふれ書れしふ羽衣の浜ふ羽衣

れ松蔵田御ゆりいとあ御寄る海辺に神社の什寶ふ羽衣さく四雅社名
絹寄るものゆり天人より伝りしと也漢まさう天人ふ羽衣伝戻しゆりふ竜
裳羽衣の曲を奉し七寶充満社寶伝陳したると遍へたまふあうへさふも
あらに總して此松原に蔓く龍々さして紀の岩代の結び松ふ倣ふて結び結
て結びしるもたりゆり紀いる祈願をやなほつるゆ山松の下に芽萌生繁て
松葉多く又肉蓯蓉もゆりもむしゆ伝松原ふ習馬ゆり今も其例遺り
く、正五九月社十又日中を近郷社馬伝多く神あふ繋くと抑伝勝振ハ
むしとり風流社名ぞ為ゆして士峯伝畫とし三保乃松原伝圖さて伝
彩り然れど三園の名山ふ相對の名勝るるく

駿河 江尻

奥津まで三里 中古江尻城あり甲州山縣三良殿或ハ穴山
梅雪もこゝふ籠らる甲州浸蔵の後城廢せり

紀州

かくく日高く江尻社駅ふはく人の業内ふ海ゆ勝てちる紀演を
いゆ清見潟ふ伝るあいまさたろひるこの示ゆる共三保社松ばら
見渡を祈々伝折白ふ

冷泉為村

富士見むと汐こゆ清見辺のまる日ふ右立ぞ松のけを四く
清見ぐさよ也来る浪社河とりゆるこふ見てさる伝富士の根 、
岩藤山
岩藤山をゆくくこふこそ見れば中程とくまちふ友る秀 、
三保ゆ清水社ゆる水まゆくれ伝とさるゆもへいるゆる松ゆ 、

瀬名川

江尻の駅中巴川の上流し西奈ハ郷名ゆ名村より
川とふゆ浅畑の沼と瀬名川と為合く巴川と云橋伝見蓄と云
ます

せゆ川や早瀬をこゆ伝水ふいも恋ゆる浪ゆるくん

庵原

あり駿州志ふ庵原郡名と又盧原とも書ハ庵原郷庵原村あり舊事記ふ盧原國
優ゆる例をゆ親波國廣田郡長田郡しゆるゆ也非しむゆハ郡縣伝別と
初瀬國 新千載
新千載

清見潟関ゆり外も伝清ゆくの松きそ浦の色くそ成れ
清見ぐさ打ゆそくれと居ゆ伝のみ伝のをさゆハ波ゆるこ
ます

ゆれもゆかり孫むまぶ居ゆ伝清見潟ふ今為ふ風もかくれ伝

盧嵜

盧原嵜の景勝 又数嵜とも云
横波撰

いゆ為のおぬ美の浪社ゆゆれて歩こゆん

横波撰

文永　篠崎のこぬれ渡の友ちどり　藤原定氏

現存六帖　風吹くまこそ波さはぐ篠崎はこぬみの渡い舟もかよはん

**角田川**　すみだ　名所　篠の浦　篠の浦　篠の浦

大文

大ぐしふるの浦あり人とまるうの月を清見が浦乃秋うた　大納言有家

清見潟　今は清見浦なべ　昌也
以潮異水又潟也　雖也

新古今

ちはやぶる神とも知らぬ波の上に清見がせきを誰かすゑけん　後二條太政大臣

元

見しひとの俤ぞうかぶ清見がせ波のしらゆふ　藤原雅経

風雅

清見がせ波とのぐしくたび夜まこそあかつき月をそなれん　皇太后宮大夫俊成

新拾遺

清見がせ沖は汐風の夕ぬさふ入日うけらふ三穂の松原　従二位行宰相大納言為尹

十首

さよふみがせ藻うの川波もたゆたへてもるの入おのの月

月花

清見がせ波はの里を雲消てそしぐれ絶ふよもる月クけ

十二月百首

君が清はと清見が関とまく岩さん波の白さ絶とうち者もる春うみ

みんなのいとおもい

清見潟さしまるいそにてくいん波はぬれさる袖をさるの月　行仲

あとをくくれくものてうれ海近き里ふさくはりぬ浦人のとつさあるさ

ようるりがるるうりいとまうしくれ句ひあれが秋のあやるる風くさくしとしひ

久る人のことはもちりの入ぬ清はよもあら風ひとまれあ浪ちはく

桃の上手ちをつぐ

あるこそよ名所ふ安ろ清見潟ひ波のりる秋さ月　河仲

清見が関も過うくまぐ一面もそくへぞ沖は石むくくちはひあるら

ひれて波ふむもぶ藻の塩屋ふくふ風ふ伝飛ひるをあ久ろり船ひとそふ

久りあの川まあれひるもありひ久ぬぐきつろうしむ　紫雀が自至

の御時勝門とふのあの川満ふく逆謀発一久れされを平らげん

たあふうぢれ民アく忠文を清ろ一久る武南ふ至りてさくまう

久るぐ清原の重藤といふ者民アく伴ひくくんやんこそはうさまそ

行久ぐ漁舟ぞ火の紅葉寒して浪を焼驛ふ秋の夢ち知

山を過とふ唐の鈴を多ぞ先久れぐ民アん浪とあ一久り

と聞ふをあろれも

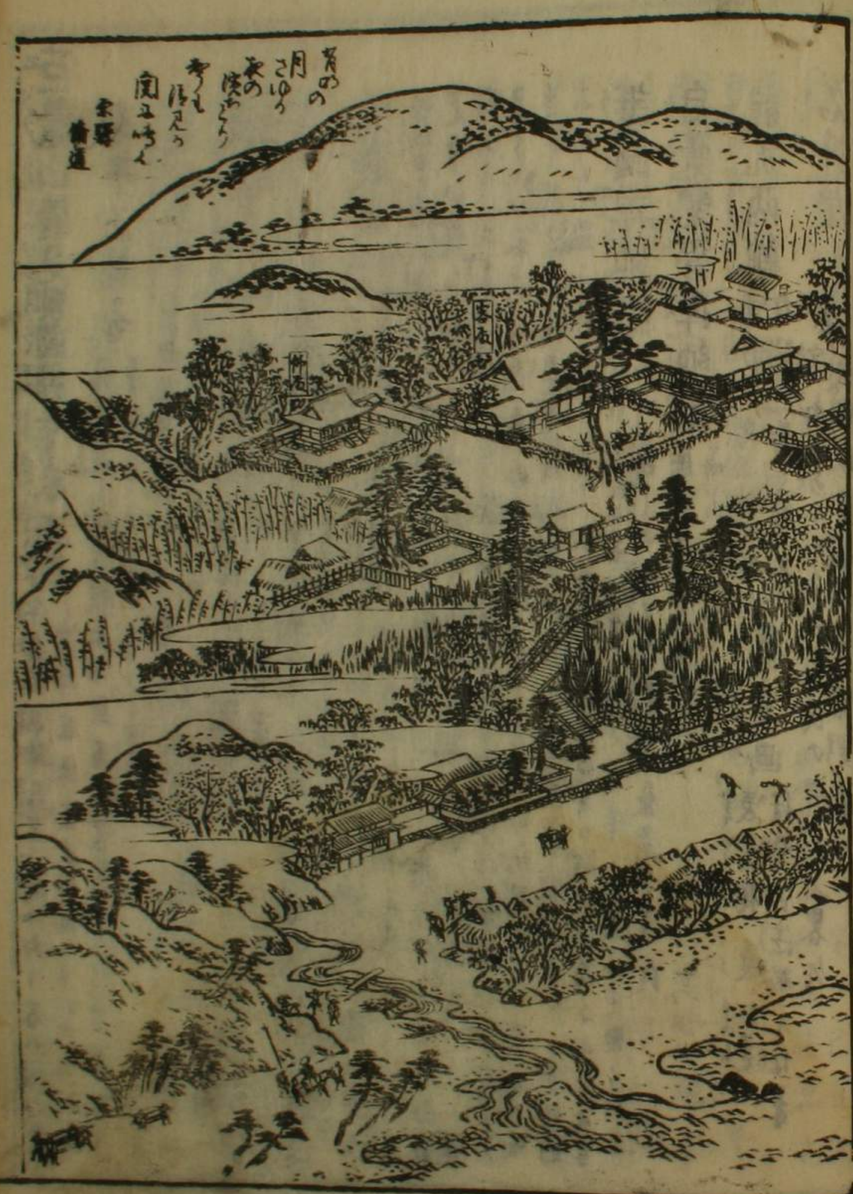
清見ぐ関とうきてわ人るう物はうりをりをうん　まり

清見嵜
清見寺

千五番
清見ゝ
うゝゝゝの塩
やしる夜へ
月ゆ仏の
とゆるゝ
ゝゝり

俊成女

清見ゝ
海むし
めゝしさ
同し
秋の風



巨鼇山清見寺國禪寺求玉院

本尊正觀音　庭像長三尺客殿ニ安置ス慶長年中公宗と云

客殿最側の秋間ニ掲る額ニ

永世孝享

皎月長輝清見寺

芳風不斷駿河山

琉人齋孫朝陽の筆

客殿ニ掲る額ニ

諸佛宅

上と同所ニ掲る額ニ

朝鮮人書　鷲山人書

琉人求玉院大洋尚公大居士又山中ニ此碑あり其書云

足利尊氏公像　琉人求玉院大洋尚公大居士又山中ニ此碑あり其書云

客殿畫　獅子牡丹　將軍探幽筆

此清見寺の奥人文殊の繡を奥ニ則法諸ニ授けゆく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

もろもろの素居士おの裁々みな詩演ふ〜て汐汲汐濫蛭電はなつ
いと寂々さ〜く風流さ〜い無う〜ち月はなやみ為ふ〜て須
磨赤石を双びさる物色之謝莊が月の賦ふ白霧空ふ暖く
素月天ふ流ると贅せ〜ゃ比わそんの事ゆゑ〜

清見寺十境　清音閣　山門　當山十一世関挾和尚稿

峻嶒高閣倚祇林直對松原十里臨大海風烟
連慢卷諸天鐘鼓傍波流鶴邊聲落應真錫霜
後月明長者金千歳依然形勝地將令騷客此
役簪

將軍石　在山峯

尊公陣跡淵之濱石古名存吾自新崔嵬渺西
三十萬天扶漢運五千人鼓鞳聲合磐城浪旌
旗色迷櫻野春維昔將軍茲所憩老松風雨聲
蓁〜

清淨觀

海邊花木五雲興樓在補陀岸上憑風韻湖音
隨梵唄天昏樹色掛龍灯瑤池亟佩空中響銀
漢仙槎月裡昇坐想人間難可到鼇峯鐘磬度
嶮嶒

分境亭　在山麓

絶頂樓闌霄漢間清秋此日一攀洲前暮色
三峯雪樹抄人家四水灣引雨纔分龍爪嶺凌
波欲動鷲頭山雄風須賦披衿客不是蘭亭興
詎閑

三保

平楚蒼然浮海潮中存古廟畫蕭〜羽衣松掛
烟霞色鴨浦波連烏鵲橋日愛千帆如雪點雲
飛四面似山朝夕陽一半漁村免天樂時聞月
裡簫

利生塔　客殿西云北琴壇

湧出瑠璃界塔擎落海中峯梯過鳥道卷慢倚
龍宮咫尺天城雪烟霞巴水東勝因菊所化色
相是真空

閣音堂　客

亭子藤蘿腰亭外潮光戸牖間魚龍吹浪出舟楫傍
欄還驛樹横沙月餘霞當目山原眺寺思夜早
晚此占閑

庭中瀑布

九曲泉

九曲懸崖上銀河下碧霄濺雪樹抄細落
芭蕉疑入匡廬岳也攀鳥鵲橋許由不洗耳此
地無煩敵

袖子浦

鳳影横沙晚淚痕袖浦濤蘆花連斥鹵紅樹照
林皐江白風頭促月低舟楫高妻其多旅思沾
幷擣縞袍

田子浦

三保從西出正東田子浦江雲分駿亘嶽雪照

春秋山向テ五原ニ起ル波連テ七澤ニ流ル漢撫風化ニ在リ酒

詠古人韻

春暮紀

今日い清見寺に尊興ぶ波ぶ静ふひうひふ三保の
松原ん〜波りあ〜その景いく〜さ〜〜〜り

清風のかんるもそぐ清見ふ海をみふ波をくこ〜の松原　光度々

悪詩をどいちはそ〜んの様ふ作りて住持ふんせられば出れてい顔ふ

絶妙　新詩　聽更　佳推　儀酬　和隔　天涯　月吟　風伸　雅懐　芳聲　遠世　京花客　嘯　大梁和尚

かくいく〜ふ紙ぞ〜めし〜て所ふ家ふめも面ふ付る所物語ふとあり

昂奥の發句ほうらきれ〜れしとあれ

月よんうたちよ来れ名清見ふ　送芳
かあ〜ふ〜ち〜ん遠の　ゆ〜ふ波

うくを濡く波ふるまでぞ〜ふ〜ふ居させ給ひて〜ふ〜ふ〜て所ふ

名ぶめて〜今宵い月ふ紙清見ぞ〜〜〜ふ〜ふ〜ふ〜〜〜〜

清見ふ〜〜一夜いの〜ふ紙清見月とおわろ紙ふ　長緑

此紀行ハ寛永十二年の秋二條殿の左相府若公烏丸三相光度卿おぼしめしの所使ふ吾妻ふ御さ申ひ〜ふ紙ふ

ふ紙ふ〜ふ〜ふ〜

石あり岡辺の点ふ布たくさんとて所あり むく 岡ちろ布松さうさうが
猶りあり人ふ形りくさなと 間 ㊐
吹と雖と清人うくふ風ワもれ見おろふをうけ京くさを
ひろくさをろくろ清見をうあるもで独ふ ひくる 風を

## 興津（駿河）

和名鈔ふ息津と書れ或ハ奥津又ハ沖津ともも書り 井中元訓里拾式町
ハ道ハ山水の風景真ゆやりて東海道第一の勝地と名高奥津海苔
お紀ひくさ儀ふちろ紀岩拾ひけね浪ふと独ゆれくり 源光行

甲州身延山道 奥津駿 左の方ふ法華題目堂あり是ちり身延山への参詣
道也 蒲 まで十三里 餘 其道法も奥津くり 完原 まで四里
八町 万沢 まで三里南部 まで三里 身延山 蒲 まで三里ちゆふ於く 諸堂 巡
参ーー日蓮上人真骨 寶塔 八 ーー 奥院 まで五拾町 山道ふ諸堂 ーー 奥
院とり 赤沢 村まで五十町 赤沢 より七面山一花表 ーー 光
町餘 一花表 より 神 まで四十町 坂路 嶮岨 又江戸より 法 るゆい富士川の
西ハ岩 側より入 万沢 まで六里餘 万沢 より身延山 まで 京江戸 去
ふ図ーー 街道 ハ富士川 より身延山 まで 都 ーー 十一里 ハ
奥津川 駿 東ふあり又 浦 田川 ともふ 山川 瀬 ゆて 初夏 中秋 の 波
まで 鮎 波 漁 る 半 多 ーー 至 ーー 夜 哭 川 の 元ふ 女 姉 妻 子 天 福 あり
文文 明西

清人くさ月ふむくるもをさ川ふ清るく彩や海ふいづれらん 薩僧正 成院 イニ 永編

波そる石さ佐ふ駒と名て奥ふ京ふ志ぐ京まん 法親王

海ふいづるみをとハあるぐ 興津ふ入ぶや瀬ての狩ふくて 本像 雅経

十六 興ハの浜ふ出ふ川みくくあとれ月ゆげをまり出ハ出ーるゆ月ハ入
たる所平ひやーー紀ハけのをハ海てーーありくくくくれいうち海ーーさ
るふ嘉くまも見ゆれハ海くくふけ志くくーー平ふーーゆくくれ紀ふ川
ゆ波ぞうに見るめくうう紀ゆり拾ゆをひお紀川と人ふ行てるる 白 仲

古奴天濱 興ハの海辺紀ふ
ゆるぐ

続後撰 ゆたくく今ハ志ハ浜ゆさ紀岩よの浪乃下に打ゆん 家隆

新拾 頼めてむこ見乃の浜乃沖ハ風ふい不波の松ふ吹らん 新古宮法師

続新古 駒ゆいむ岩木け山紀振うそ人ふ志ぬこの浜ふ分ゆん 定家

続千載 ゆ独ふうーハの波ハかくれども見ゆ人ふけ浜け名ゆう紀 藤原重家

## 岫崎

奥津川と波りて薩埵山の海岸ふ万葉の社ふ
清見ヶ崎ハ今の岫崎ことゑゑ山道ハ岩石多くして高根およりふ
通う難しと雖ハ昔の道ゆくゆくゆくの人さふ流と顧るふ暇なく過て
子志ゆくの名ゆう無阪関ゆ魚川の辺ふも此名あるハ同じく浪ゆ紀ふ
道ハ明暦元年朝鮮の信使来うしゆ時ゆ此所の中
南ゆれくゆ旅人の難ふ助く今の海道是ゆり

歌遠往作

富士山

光明記
くまの紀寄といふあり世俗孫乃岩といふ
おくは浪を
まも
うちかけ
光明
波の
物語抄
清足
波の
源氏物語
波の
東遊海道記
岫寄
しる行
通る

の浪光ぞ眼うばはぬ〳〵なりけるに大和田浦に来りて小船
に沖中ふかう漕出るに風帆飛く万里風便をたのみて白煙ふ入鷺鷥
波うち消くみ雲夕陽に入あらひく紅藍ゆもむ海龍のうちふし所
をのこそ光ぞ

つはれどる波の面にうもれおりて

山人和田浦ハ駿州志ニ云古ヘ菴流とり持船村小坂村のあたりまでふ入
江の遺あり今大和田浦といふ後世ほとれ〳〵陸地となりぬ今大和
田新田のうと云云同名近江國栗太郡坂本の村ハ近江ハ志賀郡坂本の村ハ
西成郡の内神崎と尼ヶ崎のあいだふあり駿州志ふ大和大濱ハ兵庫津の
古名ぞ大坂入津の船まづ河ふ泊る古より然ぞ故ふ万葉ふ船の泊る
と詠りと書しも非ぞ万葉の大和田ハ大坂より武里餘乾ふして
兵庫ともに十里ばかり遠ぞ今の大坂廻船のあ門ふあるべき已前ハ万葉
ふ詠しぬく大和田神崎江口をとみるふ船のそぎまる湊ぞ大坂へ入船
してあ門とあるべしも

豊臣秀吉公已後の栄ぞ

## 袖師浦

風土記云烏渡渡より東ハ袖師浦と称ハ又或ハ云袖師浦ハ
江尻より横須賀まで袖師浦と云ハ今の御村ハ
いふるのくんの出雲國ふ同名あり〳〵古歌をみる出ハ侍り

## 磐城山

今の鄰橋山ハいふ古ふいふ今ハ上道注還ハいふ〳〵もハ上橋道
ありしが古歌多し



万葉

磐城山直越来益礒嵜乃許奴美乃濱尓吾立將待

新古今

流れゐるいそ松の浪のたえぬ波はいとまもなくぬれぬる

夫合

般若坂山おそく牡鹿山ふ入る張波はれ春ふの浪の秋のよ乃月

家集

山の名の岩本も衰ぬる波はさまでが月ハ秋おろもを秋風

源氏奥

## 芝匠塙

磐城山の峠ハ西の禁ハ武蔵
菖蒲坂武蔵〳〵東の禁西ハ
陸奥の國ふ同名ありて上ハ〳〵ふ
ふ芝匠塙村あり〳〵村中東勝隈の地蔵堂ふ
丈量ハ武蔵安立ハ〳〵

## 絶海女房と

九種

飛〳〵しけ出領ハ紐京ふ〳〵あまの川寅の方ふ富士の高根ふ〳〵ふ
雪ハ〳〵ふ〳〵ハ知の方ふ愛鷹山巳の方ふ伊豆の岬酉の方ふ三保の
松原みな祥ふ〳〵〳〵て京ふ〳〵ふ江海渺然〳〵て長閑さ哉の波ふ
鮑とる海士業環狭渡ふ夏ふ張辺の蛍張ふ〳〵〳〵初房の海

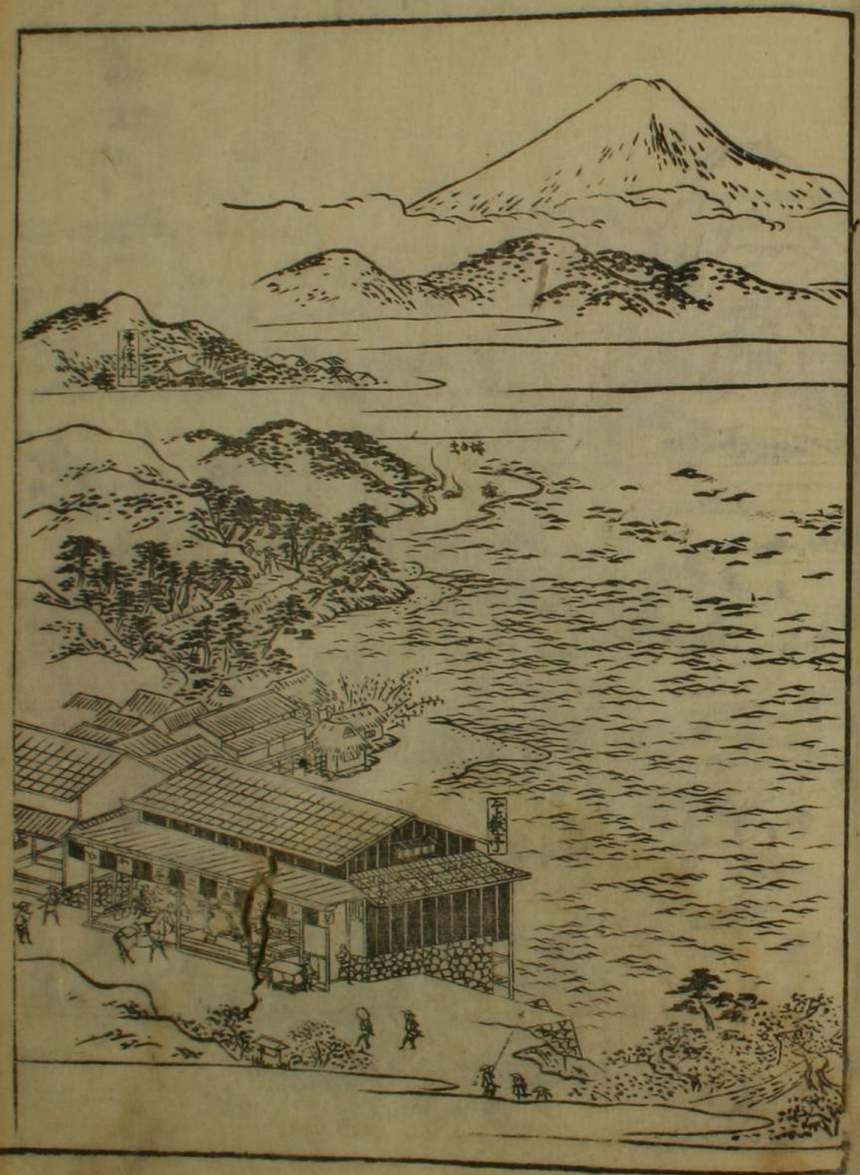
紅葉の雲と秋の中に消く浦の名所は秋の夕べ れふる 秋傷しいさ
波ふむれぬる小夜ふけぬ 月をけいと寒し
さいハ垂うし 観應の比かとよ足利のたとひ山ふ戦ふ直義はぬ利
うくして数十騎の兵船一時ふ鏖しけ討ふのりて三里のわさい修羅
通の巷こうりく叢腥く尸を路を埋こしとを平起ふも署しくあれを
薩埵山の合戦こいハ其中小書し 櫻賀も山続さこ又小田原小条こ
甲斐の武田こ爭ひしも武山嶽ふ拒薩埵嶺は崔嵬たるひし 清見
関は要涯ふりと云伝へしも宜ふこん今ハ左平と凱人 聖代の名ごと
干戈は吉永く絶く礼楽と変し 貴こ永く後世ふく足利躊躇てこの
風色は賞し 欲よこ持つくりあるこ行人も多くしこ 見ふ
名産栄螺鮑 麁埵山東の蘇西倉澤茶店ふ栄螺鮑は料理 價ふり
して三保の松原むかふ見る道中 無双の景色こ茶店の中ふ 雲嶽
高しといふ あり 遠近人 家 詩 の 俗 ふ 亭 ふ 遺 ん
半ば しくふ の 侍 女 出 沙 と 設 こ あ り こ 鮑 拾 ふ 伴 見 流 ふ
しく 嶽 あり

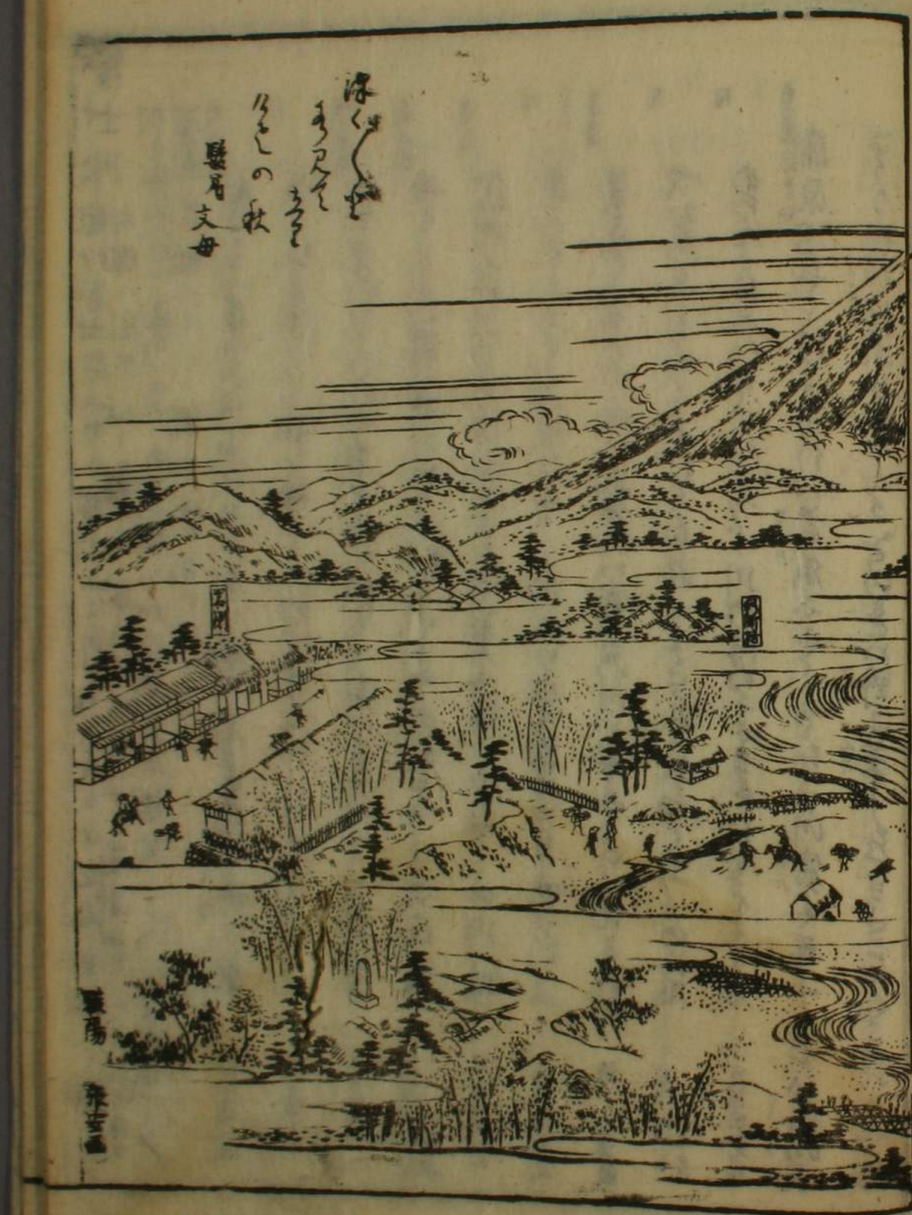
奈神木花開耶姫命 社説云 天武天皇御宇勅使甚後大
時常幣社引と称る例系四月初酉日十二月初酉日饗應の神試あり
油伊或ハ由贍又ハ湯屋とも書ん 蒲原まで三里家續きふて

駿河 由井 燒多し
輕風湯井 興ハつ〳〵掉漁船借問莫謬扇無情 山嶺 闇齊 龍煙
蒲原古城 蒲原の西向田村の左ふ永禄中小田原小条新三郎綱重
秀範多目調防守長宗荒川豊前守國信等大軍ゆく押よせ家臣吉田左近か兼宣 落合
十二月六日武田信玄 一番ふ城ふ兼 迫戦ひ久 北条方利ふ
市之丞 初陣傳右衛門 等 城し
教千駿 討れ終ふ
神原 も書ん 古原 ま で 武里三十町 富士川 ま で 三里八町 駿東立場

駿河 蒲原 ん右の方ふ吹上ケの渡といふあり 本れ 彼の塚あり
里 田むら 矢部の宿 反と 弦墓 塚の下ふ 里人 翠り
時 ふ 到 ま 疲れ 里人 隣 反 と 弦墓 塚の下ふ 里人 翠り
天正の比小野於通こ 流の鼓女 孫 扇姫の生涯の
半と書ば 十二 是 百りの中 迫 於通を真田氏ゆく豊太閤
つけ 彼 の 彼 も 出 く 寿
ひし と 彼り

羽衣山
東海
西倉沢
茶屋
此所冨士山
絶景なり
東海道第一の
風景なるべし




浮くもの
まつたくそ
ゝるしの秋
駿州 文母

富士川

富士川 駿河国富士郡にあり 駿河国にて富士日本紀私書に書れ
み源は信州八ヶ嶽より流れ甲州に到り諸流合し駿河に入る
まて海に注く道中第一の急流にして幅あの狭く除限難し
竹流れあり船にて渡し 満水あり船を用ひ
発古今 船よりそふ富士の川岸に日も暮ぬ浮洲が原 藤原基俊

ふれても恋ひしき人を見し川のいくせの淵ぞ逢ひそめしかな 在原業平

後拾遺 朝日さしたるひかみ雲を照てなたちもおそろしふじの川原 家隆

新後拾遺 雨そそぐ高根の雪ふりつもれて山とそのぼるふじの高嶺 入道二品親王性助

夫木 浮洲ふ竹のとりはなれ来てとふ人なくふる風一の川波 法眼慶融

同 岩にのえふのとい氷さふ〜川のわれも浮洲沢をこそ見ん 藤原家長卿

家集 墓ふ雪を雪けの水は来れい富士乃川とそ〜絶をれ 源三位頼政

同 吹ふ雪雪むとそれど白ふ波ふまさこそ絶れ白くふ〜の流 原大納言高家

同 あらんとはそひてそれとも下川のはのふ雪をとい絶もかえ〜波 九条内大臣

東慶海道記 蒲原沢立〜はるふ沢ば荒波ふ雪ひ落ふの風 藤原為家

さ〜りぬ沢狭ふ雪ふ〜るとの遠い野ふ草〜紅葉ふ〜ふ〜ふ〜ふ

先後はあれい沢旅は習ひ雪を見ひ〜られ〜ふ雪を見る程ふ富士川を渡ぬ
ひの中雪ふ石沢流れ巫峡は水のこ歌んで舟沢ふ川ふ人の知いけ
ようもさ〜ふ〜ふ老馬沢たのそ〜ふ渡ふ老馬〜海い勢色ふ〜れ
山路の雪のそふ〜ふ川の屋の水は〜流もよく知りふ雪
雪ふ笑〜雪さふ山のつ〜ふ〜ふ〜ふ〜富士川のあ

志紀沢 狭めけ〜ふ里沢歩ふ川富士川の水源ふれ乃ふを蒲原まで人〜ひ
さふ〜ぐふの山麓ふ〜安倍川を海りて人ふ文川水はみりさふをめ〜れぬるひと
いぶせ〜ふれ〜富士の根とふのふれまに人ふ〜ふ〜ふ乃ふれ乃ふ〜ふ
あ〜ふ日沢さふ〜ふ〜ふ〜

たるとみるうつくしと危うく恐ひ無中穴八月まひ魂乃清る如く一ふる

世来停馬此跡躊躇天下滔豈獨五月雨羅山

河畔爲通名利路陪陵慙愧一撫夫

水神森富士川右の山陰にあり巖上に松柏生茂れりむかし此川筋

に森の中に祠ありと或は岩穴の下に流れあるひは数多の支流と成て水神

八十年おくり長堤とかの神の贔屓に築つけ遂に水難なく過りて後

水の時々此堤の内にて流水紛紛へ〳〵なれども其さまなる紛

紛〳〵〳〵〳〵

親も討れよ子も討れよと死ん事疑く戰ひ西國の軍と申い惣て
其儀いかゞ親討れぬれば引退べき事歟と云ふ討
べき其恐敵なし云ふ作いかゞ女房家盡ぬべき田作り秋の刈取
て云ふ夏の熟〳〵と厭ひ冬の寒〳〵と嫌ひ東國の軍いかゞ甚儀い
作いかゞ其上甲斐信濃源氏等案内の者なり富士の裾を搦め
廻りいかゞ申せば大將軍は行心に隱せる勢多〳〵と申せば
思召れいらんを條でい作いかゞ但軍い勢は多少の事申さば大將軍は策ふ
ゝ〳〵と云て申仕べしとかくれば是に聞兵共皆ひ慄き敢りなく去往ふ
同廿三日辛卯の寅富士川ゆく〳〵源氏の矢合と云定なり二十三日の夜ふ
人〳〵平家は兵ども源氏の陣と見渡せば伊豆駿河の人民百姓等ひ軍ふ恐れて
或い野ふ入り山ふ隱れ或い海ふ取乘〳〵海にふ浮ひて營れ火は見へる所あり
夥〳〵と源氏の陣は遠火の多さよ實ふ野も山も海も人ふ武者〳〵有
なるいかゞせんと絶たきれなる其夜の夜半計富士の沼ふ群居る水鳥の



もが俄ゆゝ驚き立ける羽音は雷大風の如くの響ふ聞へけ
れば平家の兵ども源氏の大勢の向たるは此る所なれ別遠の力はる淡ふ甲斐
信濃の源氏等富士の裾を搦め廻り惟らん歟行末為ら有らん
取籠られて叶ふまじ〳〵是とば落〳〵尾張の洲俣ふ陸げ中とて取あもも
敢ず我先ぎふ〳〵と為ける餘りふ周章噪く弓取者は矢を忘れ
箭を忘る者は引とも〳〵弦馬ゆ人乘り人の馬ふ和乘繫ける馬ふ騎て馳
れば株ふ躓る事限なり〳〵其者近き宿〳〵なり遊君遊女もこに集れ
遊ひ酒盛〳〵なる或は頭ふ踏破られ或は腰ふ折られ或は嘆き叫ふ事
數〳〵同廿四日壬辰の寅ふ源氏二十萬騎富士川ふ押寄て天も響ふ
大地も驚く計ふ鬨ふ成ぬ三國震動なる平家の方ふは定り為て者せ成ふ
入〳〵見ぬれば皆逃て作〳〵なる或は故の方れる鎧取て着る者もあり或は
平家は捨ぬたる大幕ふ入て歸る者もなり九郎義の陣ふは蠅さへ翔り作
〳〵なる兵衛佐取ぬる馬なり夜甲ふ脱手水鳥鋼ふ〳〵して王城の方ふ

富士川水鳥
劫をつかけの武田と
三万騎大軍
狩野法眼春永俊圖

伏拝さしたれ全頼朝ゞ私の高名ふ非ず偏ふ八幡大菩薩の御計ひしらく宣へ
々る聽〳〵お取所ゆれば〳〵駿河の國をは一條次郎忠頼遠江國をば安田
三郎義定ふ頒らる猶も續〳〵責べりしうも後も流石覓志ゆ
〳〵駿河國より鎌倉へ帰られる義首ふ

富士川の瀬々の岩こゝかとりもそくも為る伊勢平氏共

天辰根國の御者ゆて平家物語の事あり〳〵ふ平氏水鳥の羽音ふ驚て逃
去〳〵ハ富士沼の事ふて今ハ若德寺ハ所之齊藤別當ゞ東國ふ落兵
多さ事ゆ〳〵ふうて平家ゆ在ども臆病神のはき一ツのゆくあるを
御者ふ伝り々々某ゆ御洗ゞて辨士ゆ〳〵して敵の矢ゞ疲ぜ〳〵むるまゆれ無法ふ
いくるハ是ゞと伝ぜる事も呉今の様ふ王者耳ふゞきりて覺人伝る

闘國中分源興平東方氣勢盡豪英
何須禍八公山上竿是旌旗木の是兵

羅山

曾我兄弟秃倉　富士川の東平直の左ゆ山際厚原ゝふ所ゆあり江人曾我八
幡ゝふ名ふ兄弟の石塔あり苔古く文字剥落して見ゆ寺ふ
泉寺ゝふ名ふ兄弟の石塔あり苔古く文字剥落して見ゆ寺ふ
碑あり十郎祐成と高崇院殿筆蓮蔵良覚しゆ十郎時宗ゆ鷹狩院殿富士山

四八十九

財富ゝふ見へさりゆ伝ゆ〳〵りゆ伝ゆ鬱ゞ船ゆ
首洗水首急ゆ洗ゞ所ゆ拝建久四年五月廿八日敵者祐成兄弟富士の所
狩の藤鎧井出の屋形ふ推参〳〵又の歌工友左衛門尉祐経ゆ刺殺ゆ
直石の侍ゆ十郎人ゞ切ゆ三百八十余人ふ伝ゆ員ゞ祐成ハ仁田四郎
忠常ゝ対れ時ゆ〳〵五郎九ふ生捕ゞ頼朝ゞ直ふ細ゆ伝ゞ〳〵石
て寛仁の御ゆ心ありゆ〳〵ゆ祐経ゞ始ゞ頻ふ申ゆ終ふ鑑
又ゆ伝〳〵ふ虎御前ゆ恋倉もあり祐成ゞ兎の流ゆ出ゆして
邪ひ〳〵ふ〳〵〳〳〳

小八郎義秀の面目まことに我ら程の故と持参し給て行脚ありかを記しやや
拍子合と起されて如得こう行程の半ばぐらいこれも果し紀こゑ拍子合とする
たち刀抜ねらんとする所と優〳〵さ故の振舞なるべしふ引しの肩うち
脇の下抜ぬきそも通れしこう我い切付られ給も得さりや應と旬旬て
孫の上ゆ抜ぬ上て真ぐ抜ぬ切通〳〵下役まそぎ切入るも理なる武源氏重
代の友切九行とのうたまるべきまるわはぐく所なる〳〵亦加おきう頼〳〵も是
ぞ〳〵忘念佛へや時宗忘られぬ忘多とて分の四しくこそ刀づかそ斬こうれ云云

## 古家川

吉原の西にあり和名抄に古家郷あり土人那〻〻川と云
富士川の支流ふ〳〵庵流〳〵古よりふ川とこう
是瞰京大坂のこと夏瞰朝鮮人来朝の時宿泊こう接を掛られし
高橋の山麓久和庄にあり延喜式内又三代實録後正三位初八富士山ふ
故ふこと夏接こと云

## 三度橋

## 源頂神社

後撰拾遺 四月廿日ふ〳〵の社にて桜のさうり
ふ〳〵ひとつ〳〵花の形〳〵ひとつて時ちこゝ山櫻こゝ
新勅撰 ふ早振神代の月はさえ忘れ川もあまこうこう
此社頭の清泉〳〵川もあまこうこう

法印隆弁

平泰時

東海道名所圖會卷之四 冊



新栄舎社発

[illegible]